
真剣で幻が通る道

双六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で幻が通る道

【Nコード】

N0019Z

【作者名】

双六

【あらすじ】

川神院に一人の男がやってきた。

その男、17歳ぐらいで、全身真っ黒の格好だった。

ただ一つ、その男の瞳だけが

アメシストの宝石のように、紫色だった・・・。

超、人見知りの男が歩く、摩訶不思議の通り道。

0章 設定(前書き)

まずは、設定です。

作者は小説というものを書いたことがありません。

更新日も未定で、

オリ主がチートのよくある小説だと思っています。

よろしく願います。

0章 設定

設定

・黒峰 紫貴 (くろみね しき)

男

17歳

家族

黒峰 師禅 (くろみね しぜん)

親に捨てられ、5歳の頃師禅に引き取られる

最初の格好

黒髪

髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ

黒い羽織に黒い着物

靴は黒いブーツ

まああれです、イメージは空の境界で出てくる両義式が革ジャンの

代わりに羽織を着て全身黒色な感じですよ

瞳はアメシストの宝石みたいな紫色ですよ

特徴

・破幻の瞳

ぶつちやけ刀語ででてくる見稽古の強化版

・・・チートですよ

・天性の武の才能

破幻の瞳をフルで使える身体能力、川神百代レベルですよ

・・・チートですよ

・人見知り

誰も信じてません、自分も

・戦いを行うのを嫌います

人間嫌いなのでそもそも誰かと一緒に行動したくありません

・人の言うことを聞きません

自分が認めた相手以外、最低限の事しか聞きません
自分の気分で変わります

・社会不適合者です

社会に関心があまりありません

最初は今、生きていければいいと思っています

・家事スキル

学べば一発でできますが、面倒なのでしません

・自分を大切にしません

リストカットや自殺といった自分から体をいじめる行為はしないが
怪我をしても血を止めて終わりです

自分は居ても居なくてもいいと思ってますが、育て親の師禅が
注意していたので、今のところ死のうとは思っていません

しかし、生きたいとも思っていない

・学びたい

自分が知らない事、理解できない事を知りたいと思います
これも自分の気分しだいです

・武術家ではありません

師禅に鍛えられたが、武人とは、など

なぜ武術家とならねばならないのか理解できないし
進んで戦おうとしないので、武人と思っていない

チートがいっぱいです

作者は小説という物を今まで書いたことがないので

オリ主のスキルがチートじゃないとなにもできません(笑)

温かい目で見守って下さい

後、タイトルの

真剣で幻が通る道

特に意味は無いです

主人公が幻のような人物だなあと
フツと思いつながら付けました

更新日は決まっています

どのように物語が進むか作者もわかっていません

0章 設定（後書き）

はい、駄文ですね、
また説明を入れると思います。

1章 男と川神院（前書き）

はい、一話目です

駄文で、文才もからっきしですが

どうか温かい目で見守って下さると
ありがたいです

1章 男と川神院

・・・侍・・・

それはもう消えてしまったもの・・・

しかし侍が抱いた武士道は、力と美の象徴として今までの日本人の心に深く刻みこまれている・・・

現在、日本では武家屋敷や武道家が数多く存在する・・・

しかし・・・遙か昔、侍がいた頃と比べると現代は大きく違う事があつた・・・

それは、女子が圧倒的に強いということ・・・

これは武家娘や武道家、色々な力を持つ者が多く通う、学校生活の物語

ここは川神院、関東三山の一つで、厄除の寺院として名高くそれが市の名前になるほどだという院。そして『己を高め気力で厄を祓う』という考えのもと、武道の鍛錬を行う場所として有名である

その場所に一人の男がやってきた

その男、歳は16〜20ぐらい、髪は黒髪で髪型は後ろで束ねた髪を刃物で乱暴に切ったようなおかつぱ、黒い羽織に黒い着物、靴は何故か黒いブーツ、黒い布袋を持っていた

つまり全身真っ黒なのである

ただ一つ、瞳の色だけが違っていた・・・アメシストの宝石の如く、紫色なのである

男はそのまま、川神院に入ってしまった

門をくぐると、川神院の門弟が立っていた

「本日はどの様なご用件で？」

すると黒い着物を着た男は

「・・・川神鉄心・・・居る？」

すると門弟は目を細め・・・

「・・・失礼ですがご用件は？総代との試合を望むならばまず総代の孫にあたる川神百代殿との手合わせが決まりとなっておりですが・・・」

すると着物の男は静かに首を横に振ると布袋から一枚の手紙を取り出し

「・・・居るなら・・・これ渡して・・・」

と門弟に手紙を渡した。手紙を受け取った門弟は

「・・・少々ここでお待ちを」

そう言つて門弟は男を残して素早く室内に入つて行つた

少しの間、男は川神院の建物を眺めていると、

「・・・ああ、この雰囲気、俺には合わなそうだ・・・ん？」

ぼんやりと建物を眺めていると後ろから人の視線を感じ静かに振り返ると、

黒髪のロングヘアの女が一人、門のところまで男を見ていた。

「お？着物を着ているから女だと思つたら、男じゃないか。しかしなんだその格好？葬式の返りか？誰だお前？挑戦者か？」

男は無言で女を上から下にゆっくりと眺めると、興味を無くしたかのようにまた、前を向いてしまった

「むっ、おい無視するなー、てゆうかこっち向けー」

女はそう言つて男の肩に手を置こうとして・・・空をきる

「・・・触るな、お前に用はない、消える」

女の隣で男は女を見ずに答える

女は少しの間、茫然とした後、顔をにやけて男をみる

「つれないことをいうなよーお前なかなか強いだろ？勝負しろ！最近挑戦者が来なくて退屈だったんだ」

女は新しい玩具を見つけた子どものように笑いながら男に話しかける
「・・・消える」

男は女に冷たく言い放った

「私は川神百代、次期川神院総代だ、お前名前はなんていうんだ？」

「お前はなにか武道をするのか？身のこなしが素人じゃないぞ」

「・・・・・・・・」

「お前の流派は？武器は？どの位強い？」

「・・・・・・・・」

「なーなー無視するなよーこんな美人なお姉さんがはなしかけてるんだぞー相手しろー」

「・・・・・・・・はぁ・・・ウルサイ奴だ、消えろと言っている」

男はため息を吐きながら女を見ずに答える

「やっと返事をしたと思っただらそれかー冷たい男は他の女に嫌われるぞー」

百代はふてくされていているような顔をつくり、男に話かける

「・・・・・・・・じゃぁ嫌いになっただろ？・・・消えろ」

男は百代の方を向くが顔は川神院の方を見たまま答える

「他の女は、と言っただ、私は違うぞー、むしろお前に興味がある。勝負しろー」

「・・・・・・・・俺は興味がない、だから失せる」

男の返事に百代は、

「そんな冷たい事を言う奴にオシオキが必要だ・・・なっ！」

百代は男の顔面に向かっていきなりパンチを放った。だが男は、

「・・・・・・・・ひよい」

男はその場から一步も動かず、首だけを動かし飛んできたボールをよけるように百代のパンチをよける

「あはっ、これを簡単によけるか、何者だ？お前？最近の挑戦者はこれで大抵終わるのだからなあ」

「・・・・・・・・なんの真似だ？」

男は一段と機嫌が悪くなり、目を細めて百代を見る

「やっと私を見たな、そしてこの実力、期待通りだ、ますます興味

がでてきたぞ」

百代は男の強さにますます期待し、笑顔で男にはなしかける

「・・・いきなり殴りかかってくるような奴が次期総代だと？本当にここがあの話で聞いた川神鉄心が居る川神院か？」

男がぼそつと呟くと、百代は首を傾げ、

「なんだお前、ジジイにようがあるのか？・・・まあそんなことより私と勝負だ！」

百代の反応に男は呆れながらはなしかける

「人の用事をそんなことつて・・・はあ、勝負勝負つて餓鬼を相手にしてる気分になってきた」

男の返事に百代は頬を膨らませ、

「餓鬼つてなんだ餓鬼つて、こんな美人なお姉さんを捕まえて」

「捕まえてない、むしろこっちが捕まっているんだ」

「いいから勝負しろーこんな美人の相手をするのになにが不満なんだよー」

「・・・全部、第一こっちにメリットがない・・・」

男の答えに百代は首をガクツと落としたが、なにかを思いついたかのようにまた顔をにやけて、

「全部つて・・・ん？ということはお前にメリットがあるなら私と勝負するんだな？」

男は後で後悔をする、百代の強さにはない、

どうしてももう少し百代というものに考えを働かせなかったのかを・・・。

1章 男と川神院（後書き）

はい、ありきたりですね
オリ主の性格が今後の作品で
変わっていくかもしれませんが
そこはご了承ください
ではまた会いましょう

2章 男と武神（前書き）

早くもどう書いていいか
わからなくなってきた・・・

2章 男と武神

黒い男から手紙を預かった門弟は川神院総代であり川神百代の祖父にあたる、川神鉄心の部屋に向かっていた

その頃、鉄心は

「はあ、最近のモモには困ったもんじゃのう、強い者と戦いたい戦いたいと最近はそればかり言いおつてからに…最近は何が強くなつて抑えが効かんようになってきたしのう…ワシが相手になるかそれとも武道四天王に頼みを送るか、しかし最近のモモでは相手にするのモキツくなつてきたしのう」

鉄心は部屋で戦いに飢えている孫の心配をしていた、そこへ扉からノックが聞こえる

「総代、今大丈夫でしょうか？」

「ん？よいぞ、入んなさい」

扉から院の門弟が入ってくる

「どうしたのじゃ？」

すると門弟は手紙を渡し、

「今、門の入り口に全身真っ黒の格好をした着物の男が総代はいるかと、見るからに怪しかったので要件を聞くとこの手紙を渡してほしいと、名前は言つてこなかったのですがいま入り口に待たせております。」

門弟から手紙を受け取った鉄心は手紙を見て、

「はて？黒い着物の男？その様なものが知り合いにおつたかのう？」

鉄心は手紙を読み始めしばらくすると急に驚き始めた

「なんじゃと！」

急に大きな声を出した鉄心に驚いた門弟は

「ど、どういたしました！総代！？」

手紙を読んだ鉄心は慌てて

「こつこの手紙を持ってきた男の眼は！瞳は何色じゃった！今、門

に居るのじゃな!？」

鉄心の慌てように驚きながら門弟は

「はっはい!今門の入り口に、瞳は……そういえば紫色でしたね」
それを聞いた鉄心は

「早くここに……いやワシが迎える、男は門じゃ ドン!!
!……なんじゃこの爆発音は!……この氣はモモか!?……
場所は院の入り口じゃと!まさか!？」

爆発音を聞いた鉄心は急いで門へと急いだ、

爆発音の少し前、門の入り口では、黒い着物を着て紫色の瞳を持った男と川神百代が居た

「私と戦う……メリット……金?……いや今は借金中だし……
食べ物……いや、そこまでの物は作れない……」

百代は腕を組んでぶつぶつと男と勝負をしてもらうための条件を考えていた、その頃男はというと

「……遅いな、あの門にいた奴、ちゃんと川神鉄心に手紙を届けたのか?……勝負しか言えない餓鬼みたいな女が考え込んでいるうちに早く来てくれ……面倒事になりそうだ……」

無言で鉄心の到着を待っていた

「うん……はっ!!そうか、よし!」

なにか閃いたかのように百代は男の近くに歩いていく

「よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える……どうだ?」

百代が男のメリットを言うと男は、

「……はあ、まあいいか……引き分けの場合と時間制限は?」
男がけだるそうに百代に質問する

「時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!」

百代は子どものようにウキウキしながら説明を行う

「・・・本当にそれでいいのか？」

百代は

「ああつ！さあ勝負だ！今勝負だ！すぐ勝負だ！」

とても嬉しそうだ

男は

「はあ、・・・なんで俺なんかと勝負したがるんだか・・・」

すでに疲れていた

「私の武道家としての勘が言うのだ、お前は今までの会った同い年

ぐらいのどの男よりも・・・強いと！強敵だと！」

百代は今まで自分が行ってきた勝負を思い出しながら答える

「・・・知るか、お前の勘もお前の知り合いも」

まあごもつとも、である

「・・・ふう」

百代は2、3秒目を閉じ、開くとそれはさっきまでの子どものような百代から川神院の武神、川神百代になっていた

「・・・！・・・とつとと終わらせるぞ・・・」

男は百代の様子が変わったことに気がついた

「川神流、川神百代、武器は素手だ」

百代は相手にお辞儀を行い構える

「流派・・・秘密、匿名希望、武器は・・・なしでいいや」

男は軽く頭を傾けた後、だらんと構えずに立っている

「おい、なんだそれ？名乗る意味ないし構えないって・・・」

「・・・文句は勝負中だから言え、殺してもらってもかまわん、知りたい事は願いでいいな、時間がおしい」

男が言うと百代は黙り、また構えなおす

「それじゃあ・・・始め！」

そう叫ぶと百代は男めがけて強烈な突きの連打を放った！
だがしかし

「・・・」
「フッフッフッスッシャ

男は無言で百代の突きを目で追いながら避けていた

「アハハッこれが掠りもしないか！いいぞ思った通り・・・だ！」
百代は数の攻撃を止め、速さと重さを込めた一撃を放つ

「・・・おっと！」

男は後ろに跳び、攻撃を避ける

「おいおい、今のは揚羽さんでもあたるぞ、本当に何者だ？お前？
なぜここまで動けて私に名前が届いてこない？」

「・・・」

「これが・・・次期総代か・・・そこいらの武術家とはレベルが違
うな、あの人以上だ・・・」

着地した男は考え事をしながら百代を見ていた・・・百代だ
けを

それを見逃す武神、百代ではなかった

「勝負中に考え事か！！川神流無双正拳突き！！」

「・・・！？」

とっさに百代の攻撃に気がつく男、しかし百代だけを見ていた為、
自分がどこに立っていたかまでは気がつかなかった・・・背のすぐ
後ろに門の壁があることに・・・

「！？しまっ」 ドカン！

壁を背にした男に百代は正拳突きを当てる

「ふふふ、衝撃の逃れない上での無双正拳突き、想像よりも劣った
が、四天王でもこれでおわ・・・！？」

勝ちを確信する百代・・・その時見てしまった、今まで味わった事
のない死のイメージ・・・

自分を死へと誘うであろう、紫色の瞳を・・・

2章 男と武神（後書き）

自分で読んでも下手ですね

駄文、乙です

暖かい目でおねがいしますねw

3章 男と武神 決着（前書き）

はい なんか早くもおかしくなってきました

3章 男と武神 決着

男に向けて、会心の無双正拳突きを当てた百代、勝ちを確信したがその時、見てしまった、相手の瞳を、その時感じた恐怖、自分に流れる死のイメージ、・・・殺される！

そう思った百代は無意識に動いていた、放ってしまった、・・・
・ 禁じ手を・・・

「!? ひっ！富士砕き!!!」 ドン!!!
コンクリートでできた門の壁を砕き、男は吹っ飛んでいく

・・・男は転がる、20mぐらい先を、そして動かなくなった
少して正気に戻る百代、その時気がつく、自分が何をしたのかを
・

次第に百代は段々と青ざめていく、

「わ・・・私はなにを・・・さっきの一撃で勝負はついていたのに
・・・こ・殺してしまっ・・・た？」

その場で立ち尽くす百代、そこへ鉄心が走ってきた

「なっなんじゃこれは!?! どういう訳じゃモモ!! 説明せえい!!」

そこで百代は鉄心に話す、青ざめながらゆっくりと、男に出会ってからのやり取り、決着がついてからの富士砕き、自分に感じた悪寒と・・・相手を殺してしまっただかもしれないことを・・・

「と・・・とにかく彼じゃ! モモ! すぐに川神院の救護班を・・・!
?」

そこで鉄心は止まる、ありえないものを見たように

「ああ! すぐに連れて・・・? どうした? ジジイ?」

百代は鉄心が茫然としているのに気が付き、鉄心が見ている先を見て止まる、その見た先には男の死体はなかった。その変わりにいたのは

「・・・痛い、それよりも一大事だ・・・服が」

自分の体よりも百代の攻撃により、ボロボロになってしまった着物を気にしながらこちらに歩いてくる男だった

それに気が付き、喜びのあまりに男に抱きつこうと飛びつく百代
「良かった！無事だったか〜！」ひよい「あぶっ!?!」

男によけられ、地べたに転がる百代、男は百代を見ようとせせず、鉄心の前まであるいていく

「・・・あなたが・・・川神鉄心？」

ボロボロの男に話しかけられ正気に戻る鉄心

「あつああ、いかにも、ワシが川神院総代、川神鉄心じゃ・・・おぬしが手紙に書いてあった・・・」

自己紹介をして、話そうとする鉄心、そこで頭の中で？がでる、そして・・・

「いやいや!?そんなことよりもお主!?大丈夫なのか?体は!?!」
平然と話す男を見て、さっきの百代の話を忘れていた鉄心、自分の紹介をし、手紙の事を思い出した鉄心は男に慌てて聞く

そこへ男によけられ、納得いかない顔をしながら歩いてきた百代が話かける

「・・・普通よけるか?こんな美人のハグを?・・・まあいい、そうだお前!体は!?!」

二人の問いに男は

「・・・ああ、問題ない」

男の答えに、ほっと安心する二人、しかし

「・・・腹と背中に激しい痛みと内出血、左腕の骨が折れて、アバラ骨の数本にヒビが入ってる、そして着物が死んだ・・・ぐらいだ」
男は自分の体を確かめるように見ながら、傷の具合を告げる

「「いや!?それは問題しかない(だろ!・じゃろ!)」」

男の問いに二人合わせてつつこみをいれる

「なんで平気そうな顔してるんだ!?お前!?!」

慌てながら男に問いかける百代、男は

「・・・それよりも・・・ごほっ・・・訂正、・・・臓器も傷ん

でた・・・」

ごほつと吐血し、地面に落ちた血を見ながら男は答える、そして・

「・・・あ、まずい」

どさつと男はその場にゆっくりと倒れた

その場に倒れ、動かなくなった男を茫然と見ている二人、そして

「・・・っ!? わぁー! ジジイ! 救護班!」

「・・・!? そ、そうじゃ! モモ早く彼を部屋へ! 話はあとじゃ!
!」

二人は大慌てで動き出す、百代は男をかついで建物の中へ

鉄心は急いで救護班の所へ走って行った

男を担ぎながら走る百代、走りながら男を見て、百代は

「それにしてもこいつは本当に何者なんだ? あの様子からじゃ全然本気じゃなさそうだったし・・・それにあの時のこいつの目・・・殺されるかと思っただぞ、」

腕の中で眠っている男を見て、百代は考える

「・・・勝負は私の負け、もっと長引く予定だったのに、まあいいか、さてこいつは気がついていいるかな? あのメリットのはなし・・・これから楽しくなりそうだよ」

百代はにこやかに笑っていた

そうして百代は男を担いで、男を休ませる部屋へ走って行った

「その男はモモが部屋に連れていっている、頼んだぞ」

「はい! 総代!」

救護班に指示をだし、救護班を部屋に向かわせた鉄心は男がいる部屋へと歩き出す

「彼が本当にあの手紙の通りなら、あるいはモモの渴きを癒せるかもしれないの・・・さてはて、これからどうなるのかのう? 楽しくな

りそつじやわい、彼が起きたらまずは話をせんとつて
ホッホッホと鉄心は歩きながら男のもとへ歩いて行った

3章 男と武神 決着（後書き）

一体、この小説はどこに向かうのか…
それは誰にもわからない（笑）

4章 男の正体（前書き）

やっとオリ主の名前公開ですわ

主人公の名前が出てくるのが4話以降って

ありえないっすね〜

4章 男の正体

「ジジイ、説明しろよ、なんなんだこいつは？なんで私と同じ歳ぐらいである実力の男が私の耳に届かない？間違いなく四天王クラス…いや、私レベルだったぞ？」

「なんじゃいモモ、その口のきき方は、お前は次期総代としてのだな…」

「だまれジジイ、話をごまかすな」

勝負の後、救護班の治療を終え、布団で眠っている紫色の瞳を持つ男、その横で川神鉄心と川神百代は言い合いをしていた

「はあ、なぜこう育ってしまったのかのう…まあいい、この男の事はワシも詳しくは知らなかったのじゃ、しかたなかるう」

「ジジイでも知らなかったって、どうということだ？この男はジジイに会いにきたのだろうか？」

百代が頭の上に？をだしていると、鉄心が懐から手紙を出して、百代に渡す

「ワシの知り合いの所で育っていた子でのう、その者から手紙を持ってきたのじゃ、名前は黒峰紫貴くろみねしき、詳しくはこの手紙を読んでみ、後はこやつから話を聞かんことにはのう…」

「黒峰紫貴か…手紙ねえ…」

そう言つて百代は手紙を読みだす、手紙には

『黒峰師禪くろみねしぜんより川神鉄心へ

久しいの鉄心、こんな手紙で許してほしい

お前には、言っていないかったが、私は病にふせておつての、自分の体のことだそう永くは生きられん、その前にどうしてもお前に頼みたい事があるのだ

私が引き取つて育てている紫貴、黒峰紫貴の事だ

私が死んだ後はこの手紙を持って川神市にある川神院、川神鉄心、私の親友にこの手紙を届け、鉄心の言うことを聞くように言い聞か

せてある

紫色の瞳をしている子だ

本当に勝手だと私も思う、しかし鉄心、もしも本当に私の事を親友だと思ってくれているのならばどうか頼む、

あの子を見守り、育ててあげてほしい

あの子には少々厄介な事があつての、今の今まで他人と接する事ができず、

自分から他を遠ざける節がある

私もあの子を引き取ってから、あの子に認めて貰うのに数年かかった……

あの子は可哀そうな子だ、人の温もりを知らん

もし一人で生きていくような事になれば、一生を孤独に終えるだろうあるいは自分で終わりにしてしまうかもしれない

あの子は自分を大切にせず、ないがしろにする癖がある

これも認めて貰った後から少しずつ直していこうと努力したが私では最後まで直してあげられなかった

話が長くなつたな、私もまとめるのが下手だな

あの子は頭がいい、良すぎるんだ

あの子は学ばせようとした事はすぐに覚えるし、自分の知らない事は知ろうとする欲もある

けれども心はまるで空だ、私では満たしてやる事ができなかった
どうか頼む、あの子を助けてあげてくれ

あの子の事だけが心残りだ

勝手だと分かっているがあの子を、紫貴を頼む
信じているぞ、親友

私は先に行く、あっちできつと見守っていると紫貴に伝えておくれ
ではさようなら、鉄心、私の唯一無二の親友よ『

手紙を読み終えた百代は布団で眠っている黒峰紫貴を見る

「……………」

彼女も理解できる所があるのだろうか

今の仲良しグループ、風間ファミリーや

義妹の一子が居なかったらと…

「…私は今の皆がいなかったら、今の私ではいられなかっただろうな…」

で？ジジイ、こいつの事はどうするんだ？」

百代は真剣な顔つきになり鉄心に問う

「むろん、親友の頼みだ…いや、そうじゃなくてもこやつはほっとけはできん

こやつの目をみたらすぐにわかった、孤独で他を信じられん目じゃ」

鉄心の答えに満足したのか、百代は肩の力を抜いた

「まあ詳しい話はこやつが起きてからじゃな」

そう言つて鉄心は部屋から出ていった

「…そういえばこいつの力のことや目のことは手紙にかかれていなかったな、ま、起きたらこいつに聞けばいいか」

百代はじいと紫貴の寝顔をみていた

「…この手紙の事はモモには時期がくるまで黙っておくとしようかの」

鉄心は懐から百代に渡したものの他にもう一枚、違う手紙をだして呟いていた

『追伸、

鉄心、もし私の頼みを聞けない事があるならこの手紙は見ずに処分しておくれ』

折り畳まされた手紙にはこう書いてあった、中には

『鉄心、ありがとう

お前には迷惑をかける

あの子を育てる上で知っていて欲しい事を書いておく、他言は無用だあの子を引き取ったのはあの子が5歳の時だ、あの子はとある村の子での

私が出会った時、あの子は瀕死だった

親はいなく、捨てられたらしい、村人からは鬼子と恐れられ、村人から暴力を受けたり、遠ざけられたりしたようだ

理由はあの子の目だ、アメシストの宝石のように綺麗な瞳だろう？

私はあの瞳に、破幻の瞳、と名付けた

どうやらこの目は一度みたものを覚え、簡単な事なら自分で真似できてしまうようだ

見る回数が増えればそれは確実になり、応用すらできるらしい

・・・おそらく、子どもでは出来ん事を出来てしまうあの子に恐怖し、

親はあの子を捨てたのだろう

村でも気味悪がれ、あの子を恐れ、鬼子、と化け物のように扱われていたようだ

おまけにあの子には天性の武の才能があった

あの子を引き取り、認められてからは、あの子を鍛えた

するとどうだ、あの子は15にして私を超えてしまった、信じられるか？

歳を取ったとは言え、若きころはお前にも対等に戦えた私をだぞ？

・・・恐らくあの子は今のお前よりも強い

私は嬉しかった、あの子がどんどん強くなっていくのが、

だが同時に恐れもあった、あの子は人を信じず、今は他を避けるだけだが

もし、他の者を敵と認識し、恨み、社会と敵対することがあるなら

あの子を止められる者がいるのか？と

今までは私がいた・・・しかしこれからは違う、私も永くはない

あの子には信じ合える友が必要だ

あの子を導いてあげて欲しい、頼んだぞ』

そう書いてあった

・・・しかし東の武神、西の武帝と言われ、若き頃はワシと同じ師のもと

切磋琢磨しワシと互角だった師禅を超えた子か・・・そうじゃモモと同じ川神学園にいれるか？あそこなら紫貴を気味悪がる奴もいないだろうし、モモの欲求不満も収まるやもしれん」
鉄心はそう考え、歩いていった

「・・・あわよくばモモとくつつかんのう、ホッホッホ」

4章 男の正体（後書き）

うん

こんな感じでもいいのかね…

いつになったら学校の話にいけないのか…

5章 紫貴と百代（前書き）

退避く退避く

キャラ崩壊おこしてるよー

5章 紫貴と百代

「……………」
現在、紫貴は状況がよく理解できていなかった

「…整理、開始…」

「体中が痛い、これはあの女の攻撃が当たったから、理解、可能」

「体中に包帯が巻いてある、あの後手当をされたのだろう、理解、可能」

「布団で俺が寝ている訳、あの後自分が気絶したから、理解、可能」
「自分の服装が変わっている、治療の為、着替えさせられたのだろう、理解、可能」

ゆっくりと状況を整理していく紫貴、そして自分の横を見る

「……………」なぜ、この女が同じ布団で眠っている？理解、不可能」

そう、百代が紫貴の布団と一緒に眠っていたのだ、しかも紫貴の腕に抱きついて

「…これは添い寝？なぜ？俺は凍傷になった訳ではない、添い寝をされる必要がない」

むしろ邪魔だ、寝ずらい」

はたから見たらとても羨ましい状況なのだが、一般男子からとてもかけ離れている紫貴、照れる、恥ずかしいといった事にはならず、ただ純粹に迷惑していた、そこへ

「お姉様～お客様起き…」

ノックもせず、赤髪のポニーテールの女の子が部屋に入ってきた
そこで紫貴と自分の姉が同じ布団で寝ているのに気がついた

「／／／／ひゃうっ！失礼しました！？／／／／」

なにを勘違いしたのか赤髪の女の子は顔を真っ赤にして大慌てで部屋から出ていった

「……………」なんだっただ？」

？マークしか出てこない紫貴、そんな中、騒ぎに気が付き百代が起

きる

「…ん？…ああ起きたか紫貴、どうだ？お姉さんの腕の中でいい夢は見られたか？この果報者め」

百代はいまだに紫貴の腕に抱きつきながらニヤニヤして話しかける

「…理解不能、これのどこに幸せを感じる要素がある、むしろ寝ずらい」

真顔で答える紫貴、照れてる素振りもない紫貴に百代は呆れた顔になる

「おいおいこんな美人のお姉さんに添い寝をされるなんて、普通は願っても叶わない事なんだぞ、紫貴は嬉しくないのか？」

「…意味がわからない、普通に叶わない事を願っていない者にするな、そもそも…まて、なぜ俺の名前を知っている？」

会話をしている紫貴は百代が自分の名を当たり前のように呼んでいる事に気がついた

「本気で言ってるぞ、こいつキャップと同じタイプか？…あぁ？名前？お前が持ってきた手紙に書いてあった」

百代の話聞いて、紫貴は川神院に来た用事を思い出した

「…手紙…そうだ川神鉄心に会わなくては、おい女、離せ」

起き上がるうとしても百代が腕を掴んでいるので起き上がれない、

振りほどこうにももう片方の腕は折れていて使えない、片腕では百

代を振りほどくことができなかった

「女じゃなくて私は百代だ、百代と呼べ、それにお前はボロボロなんだぞ？まだ寝てる」

どうしても腕を離さない百代、しかたがないのでそのままにいる

「…寝ずらくて寝られるか、そもそもお前が「百代」…おま「百代

！…お「百代だ」…百代の攻撃でこうなっただろう？まあ勝負を受けた以上文句はないが…とにかく腕を離せ…」

らちがあかない、そう認識した紫貴は百代を名前で呼ぶ、それに満足したのか百代は紫貴の腕を離した

腕を離されたことを確認し紫貴は体を起こした

「…そもそもお前とは「百代」…はあ、百代とは勝負をしただろう？なぜいまだに俺に関わる？」

「それは私が紫貴の事を気にいったからだ！紫貴！お前、私の舎弟になれ！！」

百代は紫貴の腕を離れた後、布団から出て立ち上がり、腕を組んでそう言った

「……………」

しーんとなる空気、珍しくポカーンとなる紫貴、そして起き上がり

「…さて、川神鉄心と話にいくか」

部屋を出ていこうと部屋の出入り口に向かって歩きだす

「おい、無視するなよ」

紫貴の襟首を掴み、ふてくされる百代

「…離せ、意味がわからない、なにが悲しくて百代の舎弟にならなくてはならない」

もがく紫貴、ボロボロの体で力がでないのか、一向に抜け出せない当然である、百代の本気の奥義と禁じ手、そこらへんの武人なら即死、武道四天王でも2〜3日は起き上がれないだろう。それをわずか半日で歩きまわっているのだ

はつきりいって、紫貴がおかしいのである

「ハハ、もうそこまで動けるのか、本当に面白いやつだなお前は、ますます気に入った！なあシキ、私の舎弟になれよ」

せっかく手に入れた自分の癒し相手を手放さんと、がっちり掴んで離さない百代

「アハハハ…そういえばシキ、お前、勝負の時の約束、覚えているか？」

百代のその言葉にピタツと止まる紫貴、それを確認した百代は紫貴の襟首を離れた

「…約束？…ああ、メリツトのことか？」

百代の言葉を確認するため、百代のほうを向く

「ああそれだ、勝負の判定はどうなったのかわかってるか？」

百代の言葉に百代との勝負の前のやり取りを思い出し、結果を思い出して答える

「…たしか百代が言った言葉は、『時間は最高5分間、もしもそれ以上すぎるようならこの場が持たないからな、時間が過ぎた場合と決着がつかなかった場合は私の負けでいい!』…だったな、あれは俺が気絶したのが勝負を初めてから10分は過ぎていたから俺の勝ち…でいいのか?」

紫貴が確認の為、百代を見る

百代はにこやかに答えた

「ああ!あれは間違はなく私の負けだ!それにしても本当にお前は頭がいいな、私の言葉を一言一句違わずにそのままだ」

百代の態度になにか違和感を覚えながら紫貴は答える

「…なぜか俺は餓鬼の頃から記憶力はいいんだ、大抵の事は覚える…まあほとんど聞かないようにしているが…なぜ百代は負けて嬉しそうなんだ?」

そう、百代はとても嬉しそうだ、まるで悪戯が成功した子どものように…

「そこまで覚えられているのなら、メリットの事も完璧に覚えてくれるだろう?」

完璧、その言葉をやけに強調して話す百代、そして紫貴は少し下を向いて思い出す

「たしか百代の言葉は…『よしこうしよう、いいか?これから勝負を行って負けたほうが相手に好きな願いを一ついう、相手はその願いを叶える』…!?!?」

その言葉を言い終わると紫貴は真っ青になる

そう、負けたほうが、相手に願いを言う…

負けた百代が勝った紫貴に願いを言う…

たしかに自分は了承してしまった、

自分からこれでいいのか?と聞き、百代は了承した

その約束のもと、自分と百代は勝負を行ってしまったのだ

やってしまった、いくら面倒だからと適当に答えて、進めてしまった
紫貴は自分に対して呆れてしまう
その紫貴の顔を見て、百代は
最大の悪戯を成功させた子どものように
とても、にやけていた

5章 紫貴と百代（後書き）

百代さんがキャラ崩壊おこしてます…

自分の文才のなさを恨みます

自分の頭の中で考えたものと

書いたもの、

少しづつ違っていくんだよなー

6章 紫貴のその後（前書き）

百代さんがなかなかのカオスに…

見事なまでにキャラ崩壊…

百代ファンの皆様

すみませんでした…

しかしこれからこういったキャラ崩壊が続くかもしれませんが
なんせ自分、文才ないですから…

キャラの個性がなくなるかもしれないかもしれませんが

そこはご了承ください…

6章 紫貴のその後

「……………」

「……………」

「……………」

ここは川神院、川神鉄心の部屋、現在部屋には、川神院総代、川神鉄心

その川神鉄心に手紙を届けにきた紫色の瞳を持つ青年、黒峰紫貴そして、武神といわれ次期川神院総代と言われている、川神百代

・・・現在、紫貴の腕にしがみついて、ご機嫌である

「…これはどういう事じゃ？」

現在の状況にまったくついていけない鉄心

当然である、黒峰紫貴が起きたと聞き、

部屋に百代と二人で来るよう指示をだし、そして二人が部屋に入ってきた

これまではいい

鉄心がわからないのはその後だ

心なしか疲れた顔をしている紫貴

これもまあわかる、あの百代と戦った後なのだから

おかしいのはその百代だ

あの風間ファミリー以外の男には、関心がまっただくなかった百代が今日初めて出会った紫貴の腕にしがみつき、一向に離そうとしないのだ

おまけにかなりの上機嫌なのである

「…紫貴君、モモはなぜ、紫貴君の腕にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、百代にしがみつかれながらも、気にする素振りをせず

黙って立っている紫貴に問いかけてみる

「……………知らん、本人に聞いてくれ、俺もよく理解できていない……………」

「いつか、出来ればコレを外してくれ・・・」

横目で百代を見て、コレ扱いをする紫貴

「…モモ、なぜ、紫貴君にしがみついているのじゃ？」

鉄心はとりあえず、紫貴の腕にしがみついている自分の孫娘に質問を行う

「シキは私の弟になったのだ！だからこれは姉弟のスキンシップだ

」

「……………」

ますます状況が読めない鉄心、頭の上の大きな？を出している

「…どうやら俺は先ほどの勝負の結果、百代の舎弟…になったようだ」

話が進まないと判断した紫貴は、鉄心にそう告げる

そう、それは紫貴が目覚めた後、百代とのやり取りの結果、そうだったらしい

少し時間が戻る

「という訳で勝負に負けた私の願いを、勝ったシキが叶えなくてはならない」

百代が紫貴にそう言っている

「……………はあ、納得いかないが、自分で了承してしまった事だしな…で？俺は何をすればいい？川神百代」

紫貴はなにかを諦めたように百代に返事を返す

すると百代はまた笑顔になり

「だ〜か〜ら〜シキ、お前は私の舎弟になるんだ！」

百代は自分の胸の前で腕を組み、そう答えた

「…舎弟【シヤテイ】、意味はたしか自分の弟。実の弟。また、弟分。他人の弟。…つまり黒峰紫貴が川神百代の弟…義弟【ギテイ】になり、川神百代と姉弟【シテイ】になる…で、いいのか？」

紫貴はまるで辞書を読んでいるように確認をとる

「ああ！まあそういう感じだ、少し固いがまあいいだろう、今、ここからお前は私の二人目の弟だ！」

百代の言葉に紫貴は違和感を覚える

「…二人目？おい姉・百代、お前には他に弟がいるのか？」

紫貴の問いに百代は

「うーん、固いなあ、ほらシキ、姉さんとかお姉ちゃんとか姉上とかモモ姉とか言ってみろ」

紫貴の質問に答えず、百代はワクワクしながら紫貴に呼んでほしい自分の名を紫貴に喋りだす

「……質問に答える、愚姉【グシ】百代」

「いや！それはないだろ！？スマン！それだけはヤメロ、頼むから」

「……………」

「…シキ？」

「…」

「怒ったの…か？」

「…」

「……………あ！そうか弟のことだな、ああ！シキの他にもう一人だけ舎弟がいる、大和だ」

「…大和？」

「ああ、直江大和、シキと同じ歳で頭が切れる、ファミリーでは軍師を名乗っている」

「…ファミリー？百代の家族のことか？」

「…最終的に百代になってるし…「愚姉？」ああ！？スマン！ファミリーだな、いや違う、家族のようなものだが、風間ファミリー、私の仲間だ」

自分の弟になったものにいきなり嫌われないよう、慌てながら答える百代

「…そうだ、今度シキにも紹介するぞ風間ファミリー、舎弟の大和や皆にもシキを紹介しなきゃなあ！あそこに入ればシキも少しは人付

き合いも…」

「必要ない」

「…なんでだ？」

百代のファミリーや大和を紹介するという提案をスッパリと切る紫貴

「百代の舎弟にはなつたが他の舎弟と関わるのは別の話だ、他の人間と基本関わる気はない…さてそろそろ俺は川神鉄心に会って話をしてくる」

そう言つて紫貴は今度こそ部屋を出て行つた

部屋に残された百代

「…まあいいさ、シキが私の弟になつただけで、まつ！あいつらがシキをほつとく訳がないしな」

そう言つて百代は紫貴を追いかけて部屋を出て行つた

その後、紫貴の腕に百代がしがみつき、

紫貴が抵抗するが、百代は姉弟はこういうものだ と

紫貴の抵抗も空しく、現在にいたる訳だ

「舎弟…モモ、それはあの直江と同じ…と取つてよいのかのう？」

「ああ、大和と同じ私の義弟だ」

とても嬉しそうに話す百代、本当に紫貴が弟になつた事が嬉しいよ
うだ

ふむむ…出会つて半日であのモモが舎弟にするほどの気に入りよう

…ひよつとして本当にモモにも春が来たか？だとすればめでたいな

「川神鉄心」

「ホ！？」

孫娘の将来の事を考えていた鉄心、そこへ紫貴から声をかけられ素
つ頓狂な声を出す鉄心

「…とりあえず、始めまして、俺が黒峰紫貴、黒峰師禅の遺言でこ
こに来た」

とりあえず自己紹介を行う紫貴

「…あ、ああ、始めまして、紫貴君、ワシが川神院、総代、川神鉄心じゃ」

鉄心も紫貴の後に自己紹介を行う

「そして私が次期…それで…」ってシキ！？それはないだ」「愚姉？」…なんでもないです」

紫貴に素っ気ない態度をとられ、部屋の隅でいじける百代、

百代があしらわれていている事に茫然とする鉄心

そしてそれらを無視して話を続ける紫貴

「それで川神鉄心、話の前に確認したいことがあるのだが…」

紫貴の言葉に百代から意識を紫貴に戻す鉄心

「確認？なんじゃ？」

「それは…」

鉄心に話を始める紫貴、それはこれからの自分に必要な事のようにだ

6章 紫貴のその後（後書き）

ごめんなさい・・・

その言葉が作者の頭に流れました…

自分で読み返して

百代を見て

誰だ？コイツ？

そう思いました

前書きでも書きましたが

百代ファンの皆様

本当に申し訳ありません

7章 武神と武神 刹那の戦い(前書き)

やばい…

やっちゃった感が半端ないッス

7章 武神と武神 刹那の戦い

日は落ち、時間は夜に変わっていた
川神院道場、そこは川神流を学ぶ川神院の門下生たちが普段、汗水を流し

己を高めようと技を磨き、心身を鍛える場である。

普段ならば大勢の門下生があり、門下生同士で切磋琢磨し合い、賑やかなこの場に、

今は4人の人間しか居なかった

川神鉄心、川神百代、黒峰紫貴、そして…

「いきなり、道場を使うために人払いを行うとはどういうことネ、師範？オマケにワタシまで残れなんていうカラ、他の門下生が不安に思ってたヨ？そしてその子は？」

川神院拳法師範代、ルーイー師範代である

「まあ落ち着けルー、彼は黒峰紫貴君とっての、黒峰師禅の…まあ孫のようなものじゃ」

鉄心がルーに紫貴の説明を行う

「黒峰師禅？あのワタシがまだ幼く、一門下生だった時にここによくきていた師範と互角だった、武帝、黒峰師禅ですかネ？」

あの人は強かった…師範と同じ師を持つだけはあるヨ

あの人は川神流ではなく、己の流派だったが…

あの人は学ぶ事が沢山あったネ、

…あれ？しかシ？あの人には配偶者がいなかったはず？どういう事ネ？」

ルーは昔の事を思い出して鉄心に聞く

「そうじゃその師禅じゃ、…まあ紫貴君は養子でのう」

鉄心がルーに説明をおこなう、そんな中、

「おいジジイ、そんなことより早く勝負を始めるぞ！」

胴着を着た百代が鉄心に向かって叫ぶ

「なんじゃモモ、その口のきき方は…あれほど言っておるのにお前という奴は…」

「うるさいジジイ、ならお前もモモと気安く言っなよ」

百代と鉄心の口論が始まる

「ちよつと待つネ！？まさか師範と百代が今、戦う気ですかネ？ここが持たないヨ？」

二人の口論を止め、問いたただす

「あだからルーをここに残したのじゃ、時間も10秒でルーに結界と技が外に飛んだら止めてもらうためののう、彼にワシと百代の実力を見せる事になつてのう」

鉄心がルーに仕事の説明をする

「ああ、ワタシが残された理由、ワカツタヨ」

ルーがガツクシと落ち込み、紫貴の前に移動する

「始めまして、紫貴君…だったネ？ワタシは川神院師範代、ルーイだよ、よろしくネ」

そういつてルーが紫貴に握手を求め、右手を差し出す、しかし…

「……黒峰…紫貴…だ」

紫貴はそれだけいうと道場の隅に歩いて行ってしまった
ルーは苦笑いをしながら差し出されたままの右手を見る

「…すまんのルー、あの子は少し複雑でのう」

鉄心がルーの隣へ移動する

「そうですか…いきなり嫌われたかと思つたヨ…しかし…」

ルーは真剣な顔になり

「彼は何者ネ？少しだけ、魔の匂いがするヨ、少しだけネ」

「ふむ、流石ルーだの、気がついたか…彼の幼少時代に問題があつての、それが原因じゃ…彼が人との間に壁を作るのも、おそらくはそれが原因じゃの」

「フム、あれは治すのに時間がかかりそうネ、しかもかなり難しいヨ」

「ああ、わかつておる、その事も理由で今回、ワシとモモの勝負を

見せる事になったのじゃ、まあ詳しい話は後で二人きりの時に話す
でな」

鉄心とルーは他の二人に聞こえないよう、小さい声で話す

「では始めるとするかの、モモやるぞい」

鉄心の声で百代が道場の隅にいる紫貴に一方的にベタベタするのを
止め、鉄心のもとへ近づいてくる

「やっと話が終わったか、さっさと始めるぞ、ジジイ、すぐにくた
ばるなよ?」

悪態をつく百代に鉄心が

「…舐めるなよ小娘が…まだまだお前に負けてやる気はないわ!」

鉄心の氣が高まり、それに気がついた百代も楽しそうに顔を笑わせる

「ハイハイ、そこまでネ!ではワタシが審判をさせてもらうヨ、

制限時間は10秒、本来ならワタシ一人では無理だが今回は他に人
が居ないからいいネ、それ以上はワタシが持たない、では二人とも

準備はいいネ?」

「うむ」「ああ!」

「それでは尋常に…はじめ!」

合図と同時にルーの結界の中で二人の武神がぶつかり合う

いまさらだが、なぜ二人が戦うかというと、理由は少し前、百代と

紫貴が鉄心の部屋に来て、それぞれの自己紹介が終わった後まで戻る

「頼みたいこと?なんじゃ?」

鉄心にむかって紫貴がそう言いかける

「…俺は師禅から川神院の事…川神鉄心のことをよく聞かせていた、
だから遺言通りここにきた…」

紫貴がボソボソと話始めた

「…師禅からは俺の今後を…川神鉄心の指示に従えと言われた…が、

俺は俺が認めた、人間の指示にしか従う気は…ない」

師貴の言葉に鉄心は眉を細めた

「…ん？まてよ…それは私の事をシキが認めたということだよな？」
百代がとても嬉しそうに、その場で踊りそうな雰囲気です。紫貴に話かける

「……………」

「…あれ？な…なぜ…そこで黙る？」

紫貴が黙ってしまったので、動揺する百代

「それはつまり…ワシがお主にとって信用できる人間かどうか…というよりも、お主に指示を出したければ、お主を認めさせる…というところか？」

鉄心がそういうと場の空気が一段、重くなる

「…ああ、そう言う事だ…俺の考え方が気に入らなければ…今の場で追い出してもらってもかまわん」

紫貴がそう言うのと今度は百代が黙っていない

「！？ 待て！紫貴！…それは私が許さんぞ！ジジイ！！」

百代が鉄心に向かって叫ぶ

「…なぜ、百代が…怒る？」

百代が自分の事で祖父に食って掛かるのか理解できない紫貴

「お前は私の弟になったんだ、当然だろう？紫貴の事は気に入っているし、手放す気はないぞ」

百代は当然だろう？と胸の前で腕を組んで、紫貴に言う

「…理解不能だ…さっきあったばかりだろう？」

紫貴は百代の言葉でますます混乱し、百代に問う

「時間なんて関係ない、姉が弟を心配する、それが姉弟だろうが」
なにを言っているんだ？と言わんばかりの百代

「…俺のことを全然知らないのに、なぜ俺を信用できる？」

百代の言葉に動揺し始める紫貴、百代は

「時間なんて関係ない、私の勘だ、それにこれからシキを知っていけばいい、時間もたっぷりとある」

「…姉弟、俺は…姉を持ったことがない…」
「私が教える」

「…他の姉弟や…ましては他の家族すら見たことがないんだぞ？」

「かまわん！それも私が教えてやる！」

「俺は…化け物…だ」

「それがどうした？私も不良からよく言われる」

「……………」

「それにお前は化け物なんかじゃない…人よりも優れる、私の弟だ」
「……………」

「お前を…私の弟であるシキを化け物なんていう奴は…これからは姉である私がぶっ飛ばしてやる、言葉通りにな」

反論する言葉がなくなった紫貴に、どうだ！！といわんばかりに笑顔を向ける百代

「……………ありがとう…ねえさん」

ぼそつと呟く紫貴

「…！？シキ！？いま…」

「ありがとう、と言ったんだ愚姉、こんな姉では今後は疲れそうだ

……………」

はあ…とため息をつく紫貴

「愚姉はやめろ！シキ！ほらお姉ちゃんと言え！」

「愚姉で十分だ」

「わかつたから、なんでもいいから愚姉だけはやめてくれ」

二人のやり取りは知らない人が見れば間違いない姉弟に見えるだろう

そして二人において行かれていた鉄心

「…ワシ、泣いちゃいそうだわい」

座り込んでいじけていた

「…気持ち悪い…」やめろ、ジジイ」

二人で鉄心に言う

「息ぴつたりだのう！？」

立ち上がる鉄心

「五月蠅い！ジジイ！…それよりもシキを追い出すのは私が許さんぞ」

話が戻った…

「勘違いするでない、そんな事最初から考えておらんわ、それにしても、よっぽど紫貴君が気に入ったようだのうもも、結婚するか？構わんぞ？別に…」

「／／／／ジ…ジジイ！？ポケたのか！なにふざけた事言ってる！／／／／」

ひゅん！と鉄心の所に飛んでいき殴りかかる百代

「凶星か！祖父の向かってなにをする！！」

百代の攻撃をガードし、反撃する

「黙れジジイ！黙らしてやる！」

「やってみる小娘！」

乱闘を始める二人、余波で部屋がめちゃくちゃになっっていく

その二人を見て紫貴は…

「……うん、それだ」

ピタッ！と止まる二人…

「…は？」

「…ん？」

なぜ、乱闘が止まったのか、理解できない紫貴

「シ…シキ…今、なんと？」

オドオドしながら聞く百代

「…ん？…うん、それだ…と」「…！？」

なにを言っている？と、きよんとする紫貴

「／／／／！？な、なななにをいつているんだ！？シキ！？まだ私たちは出会ったばかりで…いや、たしかに時間なんて関係ないとはいったが…あ、あああれは姉弟の話であってだな…いや、別にシキが嫌だというわけでは…／／／／」

顔を真っ赤にして混乱する百代

「そ…そうじゃぞ！紫貴君！そういうのは簡単に決めるのは…他に

もいいい人が沢山おるわけだし…」

百代と同じようにあたふたする鉄心

「なんだそれは！ジジイ！！お前が言ったんだろっが！」

「黙れ！小娘、お前も否定しただろっが！」

また、乱闘を始める二人

「べ…別に嫌というわけでは…それに姉としても、そこらへんの奴に大切な弟をあげられるか！シキは私のものだ！」

「アホか！どちらも百年早いわ！第一紫貴君は17歳…」

「なんだとジジイ！別にお互い卒業すれば…」

そこでまたピタツと止まる二人、

「そういえばシキ、高校には行っているのか？」

急に質問される紫貴

「いや…行っていない、というか、学校に行つた事がない…それよ
り…」

辺りを見る紫貴、つられて二人も辺りを見る

「…いいのか？部屋…めちゃくちゃになつたぞ？」

紫貴の言うとおり、部屋はめちゃくちゃだ、とても人がいられる環境ではない

「…No　！」

ムンクの叫びのような鉄心

「あーあ、さて、行くかシキ」

紫貴を連れて部屋から出て行くこととする百代

しかし…

「まてい、二人とも」

二人の襟首を掴む鉄心

「離せ！ジジイ！」

「だまれ、モモ！お前にも責任があるだろっ！」

「……なんで俺まで？」

納得のいかない紫貴

二人は…

「（お前・お主）が原因だろうが！！！！」
「？・・・？・・・？」

まったくわからない紫貴であった・・・

7章 武神と武神 刹那の戦い（後書き）

…あれ？

作者の中のオリ主像が

大きな音で崩れていきました…

…これ、もう人見知りじゃなくね？

8章 武神と武神 刹那の休息（前書き）

自首します・・・

8章 武神と武神 刹那の休息

ここは川神院総代、川神鉄心の部屋、川神鉄心と川神百代が乱闘の末、滅茶苦茶になった部屋を三人で掃除をしていた

「こ…こんなものかのう…」

とても疲れた様子の鉄心

「おー綺麗になったもんだ」

文句を言いつつも散らかった部屋を掃除した百代

「……」

特に疲れた様子もなく、ケロっとしている紫貴

「二人とも、お疲れじゃ、特にモモ、お主が最後まで掃除をすることは…正直、驚きじゃのう…始めは給料だせーだのふざけた事を言っておったのに…」

最後までしっかりと掃除を行った百代に感心する鉄心

「うるさいジジイ、私も正直最初はやってられるかと思ってやめようかとも思ったが、弟のシキが文句一つ言わずに黙々と人の数倍働くんだ、それを見てサボれるか！」

「ふむ、まあそうじゃのう」

「正直、紫貴は速攻でサボると思っていたが…これは紫貴に対しての考えも改める必要があるそうじゃ…そして紫貴がおればモモもしっかりと働く、本当にモモにはこの先、紫貴が必要不可欠になりそうだのう…」

そうなのである、部屋が荒れる切っ掛けにはなったが、本人の紫貴には自覚がなく部屋があれしたのは鉄心と百代が暴れたから、結果をみれば紫貴は掃除を行う必要がなかったのである。しかし、働けと一度言われると、文句一つ言わず、二人の倍以上の仕事を淡々とこなしたのである

「シキは掃除が上手だったなー、もしかしておまえ家事スキルめっちゃ高いんじゃないか？料理とかもできるのか？」

紫貴の家事スキルの高さ気づき、嬉しそうに紫貴に話かける

「……別に」

掃除を終え、黙って立っている紫貴

「また、元に戻ったか…ま、無視しなくなっただけマシか…」

はあとタメ息を吐く百代、しかし無視されなくなっただけ少しは嬉しそうだ

「……それよりも、さっきの続きだが…」

「「さっき？」」

紫貴の言葉に首を傾げる二人、そして二人は暴れる原因となった紫貴の言葉を思い出した

とたん又、顔を赤くし始める百代、

「／／／／あつあれか…本気…なのか？…シキ？／／／／」

「う…ウム、そうじゃ、本気なのかね？紫貴君？」

さきほどまでよりかは落ち着いていた鉄心が紫貴に問いかける

「…ああ、百代の考えも理解したしな…だが…」

問題があるのか紫貴は黙ってしまう

「／／／／そうかシキが本気なら私も…ん？どうしたんだ？シキ」

百代も顔を赤らめていたが、紫貴が黙ってしまったのに気づき、真剣な顔になる

「…いや、俺は…今までだな…その…師禅としか…人と接したことがなくてな…」

紫貴の言葉に先ほどまで上がっていたテンションを下げた百代、鉄心も真剣になる

「い…今までって、あれか？…師禅さんの手紙にあったが…シキが師禅さんに…その、拾われた…時からか？」

ありえないだろ…と驚いている百代

「…そうだ…そして…最低限以外、敷地からでないようにしていたからな…」

「…それはまた…なぜじゃ？」

紫貴の言葉に首を傾げる鉄心

「…小さい頃からの習慣でな…他の人間が…自分が気を抜いたら、襲ってくるのではないかと思ってしまうてな…いや、今はありえないとは理解しているのだが…こればかりはな…」

紫貴の言葉ははつきり言ってしまうえば、自分以外は信用できないと言っている様なものだ…

物心ついた時に親に捨てられ、村人には遠ざけられ…襲われる

そんな日常生活を送れば人間不信になつても、いや、精神崩壊を起こしてもおかしくはない

「ふむ、師禅の手紙を読んだが…これは重症じゃな…人と会話できるのが不思議なぐらいじゃわい…」

鉄心は紫貴を見ながらそう考える

…しかし、鉄心が考えるよりも、紫貴の心の闇は深いのだが…今は知るよしもない…

「……」

百代も気がついたようである、紫貴の問題が自分の考えよりもかなり深い事に

「そんな俺が…見知らぬ土地に来て、いきなり家族ができた…まだ家族というものが理解できていく訳ではないが…これはわかる…今から俺が言う事が、二人には迷惑しかもたらさない事を…」

紫貴は居ずらそうな雰囲気である、鉄心と百代はなにを言えばいいのか言葉を探している感じだ…

「…百代…鉄心…俺なんかでいいのか？」

そんな中、ただ一言、紫貴はそう言った…

それを聞いた百代と鉄心は

「あたりまえだろ！お前は私の弟だ！お前の為ならなんでもしてやる！…これからはずっと一緒だ！」

紫貴を弟と思ひ…大切な者と思ひ…守りたい者と思ひ…男と認めた百代

「ふむ…モモが君を弟と思うならばワシの孫じゃ…ワシの親友の孫替わりならばなおさらじゃ、ワシもできる事なら協力しよう」

鉄心も紫貴を家族と認めたようだ

「…ありがとう、ならば二人に頼みたい事があるんだ…これはさっきの二人を見てきめたのだが…」

さっきの二人の行動、それぞれは思い返し百代はまた顔を赤らめる「ノノノさっきのアレか…よし、私も覚悟を決めたぞ」

さっきの行動とは百代と鉄心がさっき、結婚するか？と鉄心が言い、百代が嫌いではない、などのやり取りをしながら照れ隠しで百代と鉄心が乱闘を行った事だろう

「…ワシもよいぞ」

鉄心も頭の中では紫貴と百代の結婚式を想像していた

「…百代と鉄心の本気の戦いを見たい…鉄心の实力を見たいのだ…怪我をした俺では鉄心と本気で戦えない…百代の实力ならある程度知っている、鉄心の実力が師禅と同じならば、俺も文句はない…」

紫貴は鉄心の部屋に来て言った、『師禅からは俺の今後を…川神鉄心の指示に従えと言われた…が、俺は俺が認めた、人間の指示にしか従う気はない』

この言葉の紫貴が鉄心を認める方法を提示した…しかし

「………………へ？」

紫貴の言葉の意味をしっかりと認識できない百代と鉄心

紫貴は二人を見て

「…やはり迷惑だろうか？しかし俺には必要な事なのだが…」

紫貴は断られると思い、心なしかがっかりしている…しかしそもそもはなしが噛み合っていないのだ

「い…いや、それはいいんじゃない…後で道場で見せよう…し…紫貴君？質問なんじゃが…さっき、紫貴君はワシ等のやり取りを見て『うん…それだ』…そう言ったな？あれはもしかして…ワシらの殴り合いを見て…決めたのかのう？」

恐る恐る聞く鉄心、当然である、鉄心は紫貴は百代との結婚について肯定したものだと思っていたからだ

鉄心の言葉に意味を理解した百代がじいと紫貴をみた

「…？ああ、鉄心の实力を知るためにはどうしたらよいか…百代と戦っている鉄心を見て決めた」

紫貴の一言で場は凍る…

「……………」

「…？」

固まる百代と鉄心

現状を理解できない紫貴

「シ…シキ？私とジジイの話は聞いていただろう？」

百代は最後の希望にと紫貴に問う

「…ああ、あれは俺も戸惑った、何しろ初めての体験だったからな、あんなことを言われたのは…」

紫貴の言葉におお！と期待する百代、しかし…

「人を信用できない俺と違い…今日あった俺を信用すると言う百代…あれは尊敬…なのか？よくわからないが…百代は俺にないものを沢山もっていることがわかった」

紫貴に恋愛感情はない…それどころか恋愛感情というものを理解していなさそうだ

「私の覚悟は一体…？」

その場に崩れ落ちる百代

その百代を励ます鉄心

「…？」

まったく現状についていけない紫貴

「モモ？お前は何に對して落ち込んでおるのじゃ？…まさか本当に一目ぼ「そんなわけあるか！？」…」

鉄心の言葉を遮り叫ぶ百代

「私は強い者と戦いたいだけだ！まだ私にはそのようなものは必要ない！」

叫びながら暴れる百代

「わかった！わかったから暴れるな！モモ！せっかく掃除したのに！」

暴れる百代を止める鉄心

「……………」

これが家族か…と遠い目で見ている紫貴
この状況はしばらく続いたのである

「…ん？そういえばなぜ私はすっかりしたのだ？シキは大和とはま
ったく違うだろうし…」

今まではファミリー以外の男は強い者以外関心がなかった百代
たしかに紫貴は強いだろう…

そしてこれからも戦いたいとは思っている…

しかし、ただ強いだけで舎弟に…弟にするであろうか…
否、しないだろう…

大和を舎弟にした子ども時代とは違うのである…

けれど大和を舎弟にしたのは間違いではないと強く確信している…
実際、現在の生活は面白い…

大和と一緒にいて良かったと思っっている…

しかし、紫貴を舎弟にしてまで

これからも一緒にいたいと思っっている…

紫貴と大和…

同じ舎弟で弟で大切な者…

しかし、紫貴と大和では違う感情を感じる…

これはなんなのか…

「わからない…答えがみつからない…」

大和にも感じない感情を持って混乱していた

「…まあいい…ゆっくりと見つけていくさ…」

百代がこの感情に気が付くことができるのか…

そして紫貴がこの感情を持つことができるのか…

それはまだ誰も知るよしはなかった…

8章 武神と武神 刹那の休息（後書き）

はい、やりました

確信犯です

毒を食らわば皿までも…です

壊れ始めたのならば

徹底的に壊してしまえ…

そう考え、罪を犯しました…

ま、謝罪はしませんけどね…

とりあえず

心を開いたのは百代だけです

鉄心はあくまで

家族として多少は…という感じです

家族だから信頼できる

そんな考えは甘いです

世の中では家族を信用できない方は沢山います

紫貴もです

はたして鉄心は

信用してもらえるのでしょうか？

次回に続く（笑）

・・・あ！作者は家族を信頼してますよ！

信用はしてないですけど…

9章 武神と武神 刹那の終わり(前書き)

忙しすぎる…

毎日書くのはさすがに無理です…

ルーの話し方が何気に一番難しい…

9章 武神と武神 刹那の終わり

あれから百代が正気に戻るまで少し時間がかかったとか…

そうして百代は紫貴に深く追求せず、鉄心もモモの心の中にできた感情を嬉しく思い成長するのを

見守るために、二人に追求はしなかった…

そうしてしばらくして、元に戻った鉄心と百代は、紫貴の頼みを聞くために

紫貴を連れて道場に向かったのである

そうして道場に人払いを行い、ルー師範代を交えて、鉄心と百代が試合を行う事になったのである

【長かった…作者は少し話を忘れかけていたね】

こうしてルーの審判のもと、制限時間10秒の勝負が始まったのである

「それでは尋常に…はじめ!!」

合図とともに二人の武神が動く

「いくぞモモ、気張るんじゃぞ」

「上等だ、ジジ…「顕現の参・毘沙門天」」 ドン!

百代の言葉が言い終わる前に、鉄心の奥義が発動する

0.001秒を切る神速の一撃、鉄心の闘気で具現化した毘沙門天から伸びる巨大な足で、百代は回避できずに踏み潰された

巻き起こった風が竜巻に変わる…それを…

「いきなりネ…フオオオオーッ!!」

ルーが気を発して解体し、風に戻していた

「ごほっ…久々に食らったな…」

「おお、潰れてなかったが、紫貴君が見ておるから張りきっちゃった」

…気持ちの悪い鉄心だった

「…ふざけたジジイだ、瞬間回復がなかったら、危なかったぞ…」
瞬間回復、氣で細胞を活性化させ傷を一瞬で癒す百代

「…シキに無様な姿をさらせるか！次はこっちの番だ！」

「いやじゃ、顕現の言・摩利支天」

百代に攻撃させず、鉄心は闘気で、陽炎を神格化した摩利支天をだし陽炎をつくる

鉄心が陽炎の中に消えた

「ぐ…このコンボか！ジジイばかりシキに良い所を見せて！ずらいぞ！」

「ガハハ、悔しいか？普段より隙がデカイぞ！」

鉄心の技が続く

「終わりじゃ！零の顕現、天之御中主！」

「しまった！大爆発では間に合わん！川神流、人間爆弾！」 ドカ
ン！！

百代は自爆技を使い、陽炎だけではなく、鉄心も吹っ飛ばした

「ぐおっ！そこで自爆技を使うか…せつかくの隙をのう…紫貴君に良い所を見せられんかったわい」

その隙に百代は瞬間回復で傷を癒した

「黙れジジイ！私にも見せ場をよこせ！川神流、無双正拳突き！」

「いやじゃい！無双正拳突き！」

拳と拳がぶつかりあう、しかし鉄心が力負けをして吹き飛ばされる
「むう！若さはずるいのう」

「ハハア！シキに認められるのは私だけで十分だ！」

「ふざけるでないわ、九の顕現、天津甕星！」

「ふざけていない！川神流、星砕き！！」

超スピードで落下してきた隕石を百代はエネルギー砲で撃ち砕く

「そこまでネ！！10秒たったヨ！！」

ルーの叫ぶが響く…しかし

「隙あり！無双正拳突き！」

「させるか！川神流奥義、無双正拳突き！」

二人は止まらない、お互いを攻撃しようと接近し合う

「くっ！駄目ネ！止まらないヨ！結界も百代の星砕きで吹き飛んでしまったしネ！」

ここはワタシのストリウム光弾で…ン？」

二人に割って入ろうと構えるルーの隣に人影が写る

「…毘沙門天」

ドン と百代と鉄心の間に鉄心の毘沙門天よりも小さい足が出てきて、床を割る

「…小さい、思ったより難しいな…これ」

まじまじと自分の手を眺める紫貴

「…「……………へ？」」

すつとんきような声を出す鉄心と百代とルー

当然である、今日初めて川神院にきた紫貴が、小さいとはいってもまだ師範代であるルーにも、天才といわれた百代にもできない川神流の奥義である

顕現の参・毘沙門天を使ったのだ、場の空気が止まる

「い…今、紫貴君が…やったののか？」

恐る恐る聞く鉄心、当然である、自分が何十年かけて習得した奥義を今日初めて見た子が使ったのだ

「…！？シ…シキ？お前、その体…」

続いて何かに気がついた百代が紫貴を指さす

「…ん？まだおかしな所があつたか？」

そう言つて紫貴は両腕を軽く回し、自分の背中を見ようとして、その場でぐるりと回る

「い…いや、シキ…傷は？」

百代が顔をひきつったまま尋ねる

…そう、ないのだ、傷が…

朝、門の前で百代と戦い

ボロボロになつた体と折れているはずの紫貴の腕が

何事もなかったように完治していた…

「…ああ、これが…百代の瞬間回復だ…これもなかなか難しく治るのに時間がかかったが…」

そういつて紫貴はグルグルと折れていた腕をまわし始める

「あ…ありえん…これもあの眼の力なのか？」

「どういう事だ？シキも瞬間回復が使えたのか？」

「どうということネ？頭が混乱してきたヨ？」

混乱する三人

「…落ち着いて、説明するから…」

そういつて紫貴は皆に話そうと決意をする…

自分の瞳…破幻の瞳と…過去の自分の事、師禅に拾われてから今までの事を…

9章 武神と武神 刹那の終わり(後書き)

難しいよ

次回から過去編かな…多分…

10章 子鬼と武帝 過去 其の壱(前書き)

紫貫の過去の話です
ツッコミ所満載ですが
大目に見て下さい…

10章 子鬼と武帝 過去 其の壱

「だから言っただろ？俺は化け物だつて…」

百代と鉄心の試合の後、一目みただけで技を使ってみせた紫貴

天才…もはやそんな言葉ではかたづけられない

人が汗水を流し、習得したものを一目見ただけで真似し、習得してしまう

その人物の努力を否定してしまうものだ

人が持てる才能の領域をあつさりと超えてしまっている才能…

人間離れをしている才能を人は鬼才という

「俺の過去を話そう…人に言うのは初めてだ…」

紫貴はその場にあぐらをかいて座った

それを見た百代と鉄心とルー

三人も紫貴の前に座った

「………」

そこに言葉はなかった…

鉄心は師禅の手紙である程度は知っていたが

紫貴の言葉を黙って聞くことにした…

「…どのように話せばいいのかな…」

紫貴は昔を思いだすように目を瞑りながら話し始めた

自分の存在、自分がいた村のこと、師禅の事、

………才能のこと…

人の領域を超える才能：鬼才

それプラス天賦の才を超える肉体能力…

そんなものを生まれた時から持っているのだ

一般人と同じように暮らせるわけがない

世の中には『十で神童、十五で才子、二十歳過ぎれば只の人』とい

う言葉がある

これは幼少のころは神童、秀才、天才と言われてもその才にあぐらをかき、努力を怠ると

大人になったときには只の一般人になっていたり

幼少の頃から努力を続けてきた才能のなかったものに抜かされるのである

武術にはそれがある

努力は才能を凌駕する

それが武道であり人間である

幼少から天才、神童と言われた百代も現在まで修行を行い

努力をしてきたから現在の力があるのである

しかし、黒峰紫貴、彼は違った

自我が芽生えた時には神童と言われた者や天才と言われる人間をあっさりと超えていた

そこに彼の意志は関係ない

武帝と言われた黒峰師禅に多少は鍛えられたとは言っても

それは最低限、紫貴が力を暴走させないよう、師禅が施したものである

幼少からなにもしなくても

紫貴が望まなくても

その才能は衰えるところかむしろ強まっていたのである

そんな紫貴を周りは受け止めたりはしない

憎・恨・怒・忌・呪・怨・殺・滅…

紫貴を憎しみ、恨み、怒り、忌み、呪い、怨み、殺し滅しようとする…

彼とて人なのである

いくら才能があり、天賦の才を凌駕した存在でも心はそうはいかない自我が芽生え、幼少の紫貴の周りは全員敵…

幼い子どもにありとあらゆる負の感情が襲い掛かる…

無事ですむわけがなかった…

そこにいるだけで疎まれ、恐れられ、攻撃される…

信じたものは皆、紫貴を利用するか…殺そうとするものだけ…

精神が崩壊するのにそう時間がかからなかった

幼い紫貴にできる事、それは人間から逃げるか…

心に壁を作り、他を信用しないことだ…

視界に入るものを疑い、自分が使うものを疑い、口に入るものを疑

い、自分自身を…疑った…

そんな生活を紫貴は何年も続けた、一人でずっと…

しかしそんな生活を子ども一人で続けるには限界があった…

肉体的にも…精神的にもだ

五歳の頃、村人に不意に襲われ致命傷を負った…

この頃の紫貴にはもう人間的な考えは不可能であった

喜怒哀楽は著しく欠落し、なぜ自分が生きているのかもわからなく

なっていた…

紫貴はすべてを捨てた、生きること…

村人から逃げ、村人が近づかない村はずれで紫貴はすべてを諦めた…

傷の手当をせず、食べ物も飲み物も取らなかった…

紫貴はその場から動かず自分の死を待った

それが何日も続いた、村人も気味が悪いと紫貴に近づくことがな

った

普通の子どもならばとっくに死んでいるだろう…

だがしかし、紫貴は生きていた

衰弱しきっており、言葉も発せないほどに弱りきっていたがそれで

も生きていた…

一般人の数倍あり、強靱的とも言える回復力で傷から血は止まり

水分も食べ物も取っていなかったが生きていた

かろうじて生きていた

だがそれも時間の問題であった

…ああ、やつと終わる…

紫貴はそう思いながら意識を手放した…

しかしそれでも紫貴は死ねなかった
目が覚めてしまった…

そこは死後の世界でも三途の川のほとりでも賽の河原でもなく
見知らぬ部屋の…布団の中であつた

「…ここは…どこだ？」

目が覚めた紫貴はまず現状の確認を行った…

「…！？…手当をされている？」

紫貴は自分の体を見て、傷に包帯が巻かれていることに気がついた
紫貴はふらふらながらもその場に立ち上がり、周りを確認する
「なぜ、手当をされている？村の人間に俺を殺そうとする奴はいて
も、助ける奴はいないはずだ」

紫貴は五歳とは思えない思考回路で頭を働かせる…

「気が付いたようだ…だがまだ寝ておれ、傷はほぼ癒えておつた
がお主、何日も食事をしていなかったらどう？体が衰弱しきつてお
つたぞ？」

ふいに背後から声がして、紫貴は振り返りながら飛びのく

そこには白髪頭で白い髭を伸ばした見知らぬ老人がお盆を持って立
つていた

「驚かせたかな、まあいい…お主なかなかの武の才を持っておるな、
その歳でなかなかのものだ」

老人はそう言うくと布団の隣にあるテーブルに手に持っていたお盆を
置いた

そこにはコップに入った水と…粥が置いてあつた

「食べ、お主が寝ているときに水分と栄養剤を飲ましましたが…そのま
までは死んでしまうぞ？」

老人の『寝ている時に飲ませた』その発言を聞き、紫貴は自分の喉
を片手で掴み、不審な顔をした
その姿をみた老人は

「…なに、別にお主をどうとする気はない…なにかする気なら寝ている時にしているし、…殺す気なら助けんだろ？それよりもほれ、食べ」

そう言つて老人は粥を指さす

「……」

だが紫貴は食べない…それ以前に老人に近づこうとはしなかった

「…警戒しておるのか…その歳でいったい…？」

とても子どもとは思えない警戒のしかたをする紫貴に老人は目を細めた…

「まあいい詳しい話はこれを食べた後だ…ほれ、毒なんて入つておらんぞ？」

そう言つて老人は水を一口、粥を一口食べた…

「少ししたらまた来る、しっかり食べるんだぞ？」

そういつて老人は部屋の入口に歩いて行つた

「…隣の部屋におる、なにかあつたら呼びなさい」

老人は歩きながらそう言つた

部屋の入口の戸を開けて老人は振り向いた

「…そういえばまだ名乗つておらんかったの、私は黒峰師禅、今は旅人だ」

そう言つて師禅は部屋から出ていった

「……」

師禅が出て行つてからしばらくして紫貴はテーブルの前に移動した

「……」

そこには食事が置いてあつた

粥とはいえ初めてともいえる他の人間が作った料理である

「……」

紫貴は警戒しながらテーブルの前に座り、粥をスプーンですくい、匂いを嗅いだ

「……」

そして紫貴は粥を一口…舐めた

そこからは紫貴は考えるのを止めた
粥に凄い勢いで食らいつき…

ひたすら食べた

凄い勢いで…

涙をながしながら…

お椀を担いでひたすら食らった

その間も涙は止まらなかった

だが…

「……………うまい、だがこれは？」

紫貴は涙をぬぐって頭を傾げた

「まあいいか……………」

そういつて紫貴はまた粥を食らい始めた

紫貴は涙というものを知らなかった…

毎日が生きるのに必死で

涙をながしている余裕などなかったからだ…

「食べたか…」

小さな声で呟くと師禅は戸の傍から離れ椅子に座った

「それにしてもあの子ども…何者だ？」

自分の前から飛びのいたあの動き

ただの子どもの動きではなかった

「あんな子はみたことがない、村人は鬼の子と言っていたが…」

ここは村から少し離れた空き家である

とは言っても山の中にある

村の人間も昔は狩りの時に休憩するために使っていたが

今は使われておらず、師禅旅の途中に数日前から村人に借りている

家である

師禅が野暮用で村へいったらあの子が倒れていた

瀕死の重体であった

村の人間に聞いても『殺せ、それは鬼だ』

それしか返ってこなかった

師禅は素早く家に連れていき、手当を行った

「それにあの紫色の瞳…少し魔の匂いがあるな…」

師禅は紫貴の瞳を思い出す、アメシストの宝石のような綺麗な目であった

「紫色の瞳を持つ鬼で紫鬼【シキ】か…ふん、どこが鬼だ、天賦の才が著しく高い只の子どもではないか…」

師禅はそう呟きながら紫貴がいる部屋の戸を見た

「村人は鬼だと叫んでいたが…はたして鬼を作り出したのは一体誰なのか…」

ふう、と息をはき背もたれによしかかる師禅

「さて、あの子をこれからどうするか…村にはもうおれまい、それにあの警戒の仕方、あの目…なんにも信じていない…いや、信じられないという目だ、一般の施設では手に負えまい…どうするか…」

師禅は紫貴のこれからを考えていた…

これが黒峰師禅と黒峰紫貴の出会いであった…

10章 子鬼と武帝 過去 其の壱（後書き）

ここに書かれているのは

作者の勝手な知識と解釈です

これからも続くと思います

意味がまるつきり違う…

そういう場合は指摘して下さると幸いです

作者の勝手な解釈の下、万が一

不快な思いをした方がありましたら

ここに、深くお詫び申し上げます

11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳(前書き)

紫貴の過去はどこまで考えようかな・・・
結構、人の会話を文にするのは難しいな・・・

11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳

「さて……」

師禅は紫貴のいる隣の部屋に向かった、戸を開け……

「そろそろ食べお……」

部屋に入った師禅が見たものはスプーンを握ったままテーブルに伏せて眠っている紫貴の姿だった

「……すーすー」

「……寝ておるのか……まあ無理もない……」

衰弱死しかけていたのだ、当然である

師禅は紫貴を布団で寝かせようと紫貴に近づいた

紫貴の肩に手を置こうとして……

「すー……すー……！？」

突然紫貴の目が見開くように開き師禅に向かって手にもったスプーンを突き立てた！

スプーンが師禅に刺さる前に師禅は紫貴の肩に置こうとした手でスプーンを掴んだ

「ハアハアハア……？」

条件反射に近い状態で目覚めた紫貴、現状が理解できないのか肩で息をしながら黙って師禅を見ていた……

「……落ち着け、いきなり触ろうとしたのは謝罪しよう……お主を布団で寝かせようとしただけだ……」

師禅はスプーンを離し、紫貴から少し離れた

「……………だ？」

「……ん？」

「俺を助けてどうするつもりだ？……なにをたくらんでる？」

紫貴はスプーンを構えながら師禅を睨み付ける

「別になにもたくらんでおらんよ、お主に少し興味があるだけだ……

お主、名は？」

師禅の言葉に嘘は感じられず、紫貴はスプーンを構えるのを止めた
「…よいのか？嘘かもしれんぞ？」

師禅の言葉に紫貴は首を横に振った

「…相手の顔を見れば嘘かどうかは理解できる…できなければ死んでいた」

紫貴はこれまでの日常生活で相手が嘘をついているかどうかを判別できるようになっていた

「…ここまでか…とても子どもとは思えん…じつに面白い」

師禅はますます紫貴に興味を持っていた

「そうか…その歳でなかなかのものだ…して、名前は？」

師禅はもう一度名前を尋ねた

「…シキ」

「…なに？」

「俺に名前なんてない…村の人間は俺の事を『シキ、オニ、バケモノ、オニゴ』と言っていた…だから俺の名前はシキだ…どうせ呼ぶ奴もいないしな…」

「……両親…親はどうした？」

「…親？」

「…いや、なんでもない…」

「…ここまで、酷いか…」

師禅は紫貴と話していく内に少しでも紫貴の内面を感じ取っていた…

「…よし、私がお主に名前を与えよう」

師禅の言葉で茫然とする紫貴

「…必要無い…呼ぶ奴もいないし…」

紫貴の言葉で師禅は小さな笑みを浮かべ

「必要さ…私これからお主の名を呼ぶのだから…」

師禅の言葉に驚き、言葉を発せない紫貴

師禅は懐から紙とペンをだした

そしてなにかを書くとき紫貴に渡した

「お主の名だ…今から真正銘、これをなのるがいい…」

「必要ないと思うが…」

そう言いながらも紫貴は若干嬉しそうであった
紙を受け取った紫貴は紙を見た

紙には、黒峰 紫貴、そう書いてあった

「……………」

…さっきの若干嬉しそうな表情は消え紫貴はまた無表情になっていた

「…不満かね？」

師禅は紫貴の表情を見て不満があるものだと思い、紫貴に尋ねた…

「……………読めない」

「……………は？」

師禅は紫貴がなにを言っているのか理解できなかった

「…俺、字…読めない…」

気づいた時からサバイバル生活を行っていた紫貴である

いくら歳相応に見えず大人びて見えても五歳の子ども

オマケに誰からもなにも学ぶ事ができず

生きるために必要な事は

独学と

見様見真似で行っていた

字なんて学ぶ事が出来なかった…

「…お主の名前は、クロミネ シキ、だ…」

静かに師禅は紫貴に名前を告げた…

「黒峰…紫貴…俺の…名前…」

紫貴は紙の文字を見ながら確かめるように名前を反復する…

「…くろみね？」

紫貴は？を出しながら師禅を見た

「…ああ、私の姓名と同じ、黒峰だ…嫌かね？」

「……………」

紫貴は師禅の言葉に否定も肯定もしなかった…

「まあいい…私はお前を…紫貴を拘束する気はない…私の傍にいる
ことが嫌になればいつでも、なにも告げずに居なくなってもかまわ

ない。私は追いかけないし、探さない」

師禅は紫貴を見ながらゆつくりと告げていく

「…だが、紫貴がここにいる間は私の家族だ…私も身内がいなくてね…紫貴、お主が嫌と言うまで一緒に暮らさないか？」

師禅の言葉に紫貴は固まる…

「…なぜ、コイツは俺を怖がらない？攻撃してこない？…畏か？…しかしコイツは嘘を言っていない…本気で言っている？家族？なぜ？コイツになんのメリットがある？…理解できない…わからない…」
「どうだね？もちろん紫貴が知りたい事は私が知っている限り全部教えよう…」

字、学問、雑学、娯楽、社会の事、一般常識、武術、全部だ」

紫貴は混乱する

人間は信用できない…

信じたら騙される…

人間は他を利用する生き物だ…

…俺は化け物だ、皆言っている

…こいつはなぜ俺に関わろうとする

…知りたい

一度は死んだ身だ

…試してみるか…

「…すぐには決められない、お前の事も信用できない…」

「…ゆつくりと考えなさい」

「…一つだけ…いいか？」

「…なんだね？」

「化け物…怪物と言われた俺が…ここにいても…いいのか？」

紫貴は恐る恐る師禅に尋ねた

「…お主の事はあらかた村の連中から聞いておる」

紫貴の体がビクツと震える

「…本来、怪物とは『正体のわからない、不気味な生き物、また性質・行動・力量などが人並外れた人物』のことを言う、たしかに紫

貴の正体はわからない…紫貴本人にもわかっていないのだから…性質も行動力も力量も人並み外れている…とても歳相応の子どもには見えない…」

紫貴の顔は青ざめ初め、下を見ている

「ただ…」

紫貴は顔をあげた

「それがどうした？正体がわからない？ならば知ればいいだろう？すべてが人並み以上？そんな奴は世界には沢山いる…ようはそれを自分の意志でコントロールできるかだ、できないものが世間では怪物と言われている、そして…」

師禅は紫貴を指さす

「怪物？誰も教えなかったのだから知らなくて当然だ、人が知らないものを知る方法は大きく分けて三つ、学ぶか気付くか教わるか、だ…ならば私が教えよう」

紫貴は無言で下を向いていた

そんな紫貴の頭に師禅は手を置いた

紫貴はビクリと反応したが逃げなかった

「…私がどこまでできるかはわからん、だが私の持てる力を持って…」

…紫貴は涙を流していた

涙の存在も正体も名前すらわからないのに…

「紫貴を人間にしてみせよう…」

老人の手の下で小さな子どもはずっと泣き続けた…

紫貴が初めて自分以外の者と関わりを持つ事ができた日である…

11章 紫鬼と武帝 過去 其の貳（後書き）

はい、ご都合主義な展開です

よく考えたら紫貴・・・

実際にはまだ戦ってないな・・・

12章 紫貴と武帝 過去 其の参(前書き)

いつまで続くんだろう・・・

12章 紫貴と武帝 過去 其の参

あれから数日がたった・・・

すぐに師禅に学を学ぼうとした紫貴だったが

師禅の「とりあえずなにかをする前にまずは体を休めてからだな」

という言葉に従い、

弱り切った体を休め、食事をしっかりと取った

そしてまともに体が動くようになったのを確認した紫貴は師禅の下
に向かった

それから紫貴は師禅に文字を教わる事にした

師禅は

「私の事や自分の体の事は知りたいとは思わなかったのか？」

師禅の言葉に紫貴は

「…自分の体の事はおいおい自分で知ればいい…師禅の事は自分の
目で見て知っていく…俺は自分の目で見たものしか信じない…だか
ら字だ、文字を知らなくては読めない、知ることができない…知っ
ているぞ？本というものは読めば知識が手に入るのだろう？」

紫貴の言葉に師禅は笑みを浮かべる

「まあたしかに…紫貴の言う通りだ…時間はたっぷりとあるし、本
人の言葉よりも自分で見たほうが納得できるだろう…字か…たしか
に本などの文章を知ることが知識を学ぶのにはいいかもしれん、知
っていれば後は自分で学べるからな…」

そうして紫貴は師禅に字を学んだ

最初はひらがな

これを間違えて知ってしまうとすべてが狂う

師禅は紫貴に付きつきりで教えた

紫貴には驚異的な学習能力があった

基本、学んだ事はほとんど忘れない

『紫貴が知ろうとするものは、である』

紫貴はひらがなの文字をひたすら読んだ

そして書き写した

ひらがなを覚えた後はカタカナである

紫貴はこれをひらがなの半分の時間で学んだ

恐ろしいまでの集中力でほぼ一日中机に向かっていた

師禅は

「驚異的な学習能力だな…まだ数日しかたっておらんのに…明日になってひらがな、カタカナを完璧に覚えていたなら…次にいつても良いかもしれん」

「紫貴、私は少し出かけてくる」

「あ、ア、い、イ……」

師禅の言葉に紫貴は反応せず復唱しながら文字を書き続けていた

「聞こえていないのか、反応する必要があると取ったか…」

師禅は少し落ち込みながら建物を出ていった

そうしてしばらくして師禅が返ってきてても紫貴は師禅が出て行く前のままの姿で

同じように学習を行っていた

師禅は苦笑いをしていた

「これ紫貴、少しは休め、時間は沢山あるだろう？」

師禅の言葉に紫貴はピタリと手を止めた

「俺はすぐにでも本を読みたい…疲れたら自分で休息をとるさ」

とても五歳児には見えない

「そうか…しかし紫貴、そろそろ夕飯にするぞ…続きはその後でいいだろう？」

師禅の言葉に紫貴は

「…今書いているのが最後までいったら終わる…」

そう言って紫貴はまた書き始めた

「…やれやれ」

師禅は夕飯の支度に向かった

「…それにしても凄まじい集中力だ…欠片も残さず吸収してやるという感じだな」

そういつた感じで次の日には紫貴はひらがな、カタカナの読み書きは完璧に身に着けていた

「…これで本を読めるのか？」

紫貴は師禅の前で問う

「…ほれ」

師禅は一冊の本を紫貴に渡した…

紫貴は本を開き…

「…」

本を閉じた

「で、どうする？」

師禅の問いに紫貴は

「…このひらがなでもカタカナでもないのはなんだ？」

「…それは漢字だ…昔の本ではむしろ漢字のほうが多い…」

「…ではこの漢字を知りたい」

紫貴の答えに師禅は

「まあ落ち着け、ふむ、どうするか…お主ぐらいの歳では漢字はまだ早い気もするのだが…」

紫貴はまだ五歳、本来なら外で遊び、絵本を読むような歳だちなみに紫貴の歳も師禅が五歳と決めた

正式な歳がわからないので

名前をもらった日を誕生日にし、歳は師禅が村人に

紫貴の生い立ちを聞いたのだ

その時ある程度紫貴の生い立ちを知ったのだが

それはまたの機会にしよう…

「これを紫貴にわたそう…本来ならこんな教え方はしないのだが…お主なら大丈夫だろう」

そういつて師禅はさっきとは違う本を紫貴に渡した

かなり厚い本である

「…これは？」

「漢字の辞典だ、そこに漢字が書いてある…他にも色々あるぞ」
師禅は他に、沢山の辞典を出した

小学漢字・小学国語・小学漢和・類語…

「こっちはまだ早いだろうが…まあ好きに読み、わからない事があつたら私に聞きにおいて…時間は沢山あるんだ、ゆつくりやるんだぞ？世の中にはまだまだ…実際に見ないとわからないことが沢山ある…見てもわからない事もな…世界は広いのだから…」

紫貴と師禅が共に過ごし始めて早くも一年がたった

その間に紫貴が師禅の下から去る事はなかった

紫貴は師禅から沢山の事を学んだ…

読み、書き、そろばん…

沢山の本を読み沢山の事を学んだが…

紫貴は基本、外に出たがらなかった

外に出て山に行く事はあつても村には、人里には行かなかった

だからこの一年、紫貴が会話を行ったのは師禅だけだ

師禅も悩んだが、紫貴に強制はしたくなく

紫貴の望む通りにした

そんなある日…

「紫貴」

師禅の言葉で本から目を離れた紫貴が師禅の近くにやってくる

「…なに？」

紫貴が近くに来た事を確認した師禅が話始める

「紫貴、お主と共にいて一年がたった…どうだ？私を信じる事ができたか？」

いきなりの質問に戸惑いを見せる紫貴

「…いきなりだな…信用も信頼も尊敬もしている…」

紫貴の答えに満足した師禅は話始める

「実はな…初めて紫貴と出会った時に話をしたが…私は旅人だ…」

「!？」

師禅の言葉にある程度なにかを感じ取った紫貴

「…もともとここには数カ月だけいるつもりだった…お主と出会い、時間を忘れていたが…そろそろここを離れようと思う…」

「……………」

紫貴は黙った師禅の言葉を聞いていた

「そこで紫貴、お主に決めてもらう…これからの事を…」

「……………」

「…私はお主を家族と…孫のように考えている…だからお主が決めるのだ、私と来るか…ここに残るかを…」

「……………」

「…明日、答えをもらう、村にはいられないだろう…しかし、ここから少し離れた町には施設というものがある、お主のように親がない者を養う場所だ…ゆっくりと考えなさい」

そう言っつて師禅は部屋を出ていった

「……………」

紫貴は無言のまま、立っていた

そうして次の日…

師禅と紫貴は部屋にいた

「…答えをもらおう、紫貴」

師禅の問いに紫貴は

「俺は師禅と一緒にいたい…他の人間は怖い…答えは最初から決まっていた…だが」

紫貴は師禅を見る

「…俺のような怪物が…一緒に…師禅といていいのか？」

紫貴の問いに師禅は笑みを浮かべた

図鑑も読んだ

山に行き、川に行き、

山や川の生き物を見て知った

植物、昆虫、動物、魚、果物、野菜…

太陽の事、月の事、星の事

時間の事、季節の事、

沢山の事を学び、気付き、教わった

師禅に…

山に…

川に…

自然に…

沢山の事を学んだ紫貴、まだまだ学ぶ事が沢山あり

それを知ることが紫貴にとっての楽しみであり生きがいになりつつ

あった

そんな紫貴であったが

武術だけは学ぼうとしなかった

師禅は武術の達人であった

本人曰く、『引退した只のしいさんだ』らしいのだが

それでも世界でトップレベルだ

紫貴は知らないが…

家には武術に関する本が沢山あった

でも紫貴は読まなかった

なぜか…

師禅が言ったように怖いと思ったのだ

たしかに紫貴は怖いと思った

力を手にするのが…

だが…

「…それもあった」

紫貴ははなしだす

「…なにか他に理由があるのかな？」

師禅の問いに頷く紫貴

「怖いと思っただき、力を手にするのが…けれどそれ以上に…」

師禅を見る紫貴

「師禅が俺を恐れ、怪異を見る目で俺を見ると思っるのが怖かった…」

紫貴の答えに眉を細める師禅

「…私が紫貴を…？」

紫貴が何を言っているのかいまいちわからない師禅

「…一度だけ武術の本を読んだ事があった」

そっぴいなながら紫貴は部屋の壁に近づいていく

「それには氣の事が書かれていた」

紫貴は壁の前にたった

「俺は喜んで知ろうとした、氣の存在、感じ方、どういつ働きをす

るのか、コントロールの仕方…」

左手で壁を触り、右手を握り振り振りかぶった

「…そして、試した」

紫貴はゆっくりと軽く壁を…殴った

バキッ

「そして知った…これは子どもが出来ていいものではない」

壁には穴が開いていた

木で作られた壁に小さく、

…子どもの腕ぐらいの大きさの穴が

「…だが、それができた俺はやっぱり…」

穴を見つめる紫貴

「化け物だ」

本を読んで氣の事を理解した紫貴

一般人では氣を認識するのも難しい

武人でも氣を認識してからコントロールし、使えるようになるのに

はかなりの時間と努力が必要だ

それができた者が、長い時間練習して技として使える

紫貴はやった

氣を認識しコントロールして
腕を氣で強化し

壁に穴を開けた

六歳の子どもがだ

紫貴は師禅を見た

「これでも俺は化け物ではないというのか？」

紫貴は師禅に問う

「.....」

チヨイチヨイ

師禅は紫貴に手招きをしていた

「？」

紫貴は師禅の横まで近づいた

「てい！」　バシッ

「！？がっ」

師禅は紫貴のおでこにデコピンをした

それだけなのに...

紫貴は吹っ飛んだ

ゴロゴロと転がる紫貴

「ぐお...」

おでこを抑えて悶える紫貴

「阿呆が、武術に関わろうとしないのは私が恐れるからだ？」

師禅の言葉に反応する紫貴

「俺が愚かだと！？本で読んだぞ！氣は武術の基本で、これは暴発、

暴走する可能性が高いと！」

おでこを抑えながら師禅をにらむ紫貴

「だから私が教えると言っておいただろう？なぜ聞かない、私が紫

貴を恐れる？ありえんわ」

師禅は紫貴と同じように構えた

ただ違うのは壁まで2〜3メートルはあるということだ

「これぐらいできてから言うがいい！」

師禅は拳を突いた
凄まじい力で

突風が吹き、拳から氣を纏った一撃が飛び壁にあたった

ドカン!!

風が止み、紫貴を見ると壁には2メートルぐらいの穴が開いていた

「紫貴……」

その言葉に茫然と壁を見ていた紫貴が師禅を見た

「どうだ？私が恐ろしいか？」

師禅の言葉に紫貴は首を振る

「……なぜ？」

紫貴は理解できない

「普通の人間には……ましてはこんな老いぼれにはこんな事はできん
……だが紫貴は恐れない……それは普段の私を知っているからであろう
？」

師禅の言葉に啞然とする紫貴

「紫貴の事はこの一年、ずっと見て知ってきたつもりだ、そんなことでは恐れん」

師禅の言葉に紫貴はふっと笑った

「……ではこれからは氣の事を教えてくれるか？」

これからも……

それはこれからも紫貴は師禅の傍にいたいということだ

「……よかるう、実際に氣は危険だからな、しっかりと教えてやるう」

「……お手柔らかに」

「逃がさんかな？」

師禅の言葉に紫貴は

「……まあこれからもよろしく」

そういつて紫貴は壁を見る

そこには小、大の穴が開いていた

その間に

「……こうして」

紫貴は師禅が構えた通りに構える

「・・・こうか」

紫貴は師禅と同じように拳を突いた

ドン！

紫貴の拳から氣を纏った一撃が飛び出し壁にあたった

そこには1メートルぐらいの穴が開いていた

「・・・小さいな」

紫貴は師禅を見る

「しっかり教えてもらおう」

「・・・私の技か？・・・見ただけでか・・・骨が折れそうだ」

「逃がさんからな？」

こうしてこれからも紫貴は師禅と一緒に居ることを選んだ

紫貴が人を初めて信じた日でもあった

「ところで師禅・・・」

「・・・なんだ？」

旅の支度を始めようとした師禅が振り向く

「ここは借りていた家なのだろう？」

紫貴は壁を指さす

そこには大、中、小の穴が開いており

そこからは外から朝日の光が綺麗に差し込んでいた

「・・・いいのか？あれ？」

「・・・」

師禅は固まる

「本で読んだぞ、人の物を壊したら弁償しなくてはいけないのだろ

う？器物破損等罪、俺は金を持ってないぞ？」

紫貴の言葉に

「・・・紫貴！急いで支度だ！出来次第出るぞ！」

師禅は凄く速さで部屋を出て行った

「・・・おい、逃げたら罪になるのだろう？犯罪者は捕まるって本に・・・」

紫貴も師禅に続いて部屋を出て行った

「なんでそんなに詳しいのだ！」

「師禅が前に酒で酔って持ってきた刑法典の本に載っていた、たしか刑法第261条で過失犯もつく、他人の所有物を損壊するなどして、その価値を減少・滅失させる罪だ、三年以下の懲役、または30万円以下の罰金・・・」

「喧しい！早く支度しろ！！」

酒は止めよう

そう思った師禅であった

12章 紫貴と武帝 過去 其の参(後書き)

ごめんなさい

作者にはまったく知識はないです

インターネットは便利ですね(笑)

13章 紫貴と師禅 過去 其の肆（前書き）

やっと紫貴の過去編終了です
長かった

みなさん、字の間違いなどがありましたら
教えて頂けると嬉しく思います

13章 紫貴と師禅 過去 其の肆

「よかつたね・・・師禅・・・」
「・・・まあな」

旅立つと決めた師禅と紫貴

あの壁がどうなったかというところ
紫貴が

「逃げるのか？なぜ？駄目な事なのだろう？警察がいる意味がない
ではないか？」

と師禅に言い続けた結果

師禅が村に謝罪に向かった

村の人たちは

「・・・ああ、あの家か？かまわんよ、もう誰も使わないし」

山奥にある家は

もう山に狩りに行かない村人には無用の物とされ、特に修理も弁償
も必要なしとされた

そうして師禅と紫貴は無事に旅立つ事ができたのである

「・・・紫貴の奴、途中から質問がおかしくなっていたな。『なぜ、人
間が人間を裁く？勝手ではないか？大人は理解できない』：だった
か、紫貴には世の道徳もすっかりと教えんといかんな・・・」

幼い頃は正しい事、正しくない事にうるさかった紫貴、

現代では・・・まあ、今は過去の話だ

「・・・ところで師禅：これから何処にいくのだ？」

自我が芽生えてからずっと村にいた紫貴、外の世界は初めてである
と言うより村の外に世界があると考えもしなかった紫貴

「そうだな・・・私の用事は終わっていてな・・・本来なら私の家に帰るの

だが…せっかくだ、紫貴にこの国を見せてやるつもりだ」

師禅の言葉に目を輝かせる紫貴

「本当か？地図でみたぞ？日本は広いのだろうか？何年かかるんだ？」

「……………別にすべて歩く訳ではないぞ？」

「？」

村には車すらなく、住んでいた家には乗り物や交通機関に関する本はなかったので

理解ができない紫貴

「それは旅の途中で教えてやる、とりあえず日本47都道府県、すべてまわろうか…その間に紫貴には武術の事を教えてやるう」

「……………楽しみだ」

こうして旅にでた二人

「師禅：金は大丈夫なのか？」

「…路銀の事か？子どもは金の心配はせんでいい…なに、若い頃にたっぷり稼いだからな、老後の心配はない…」

こうして数年かけ、日本を周った二人

海や船、飛行機や電車、車などを初めて見た紫貴が師禅を質問攻めにしたのは余談である

その間に紫貴は沢山の知識を学んだ

人の多さ、世界の広さ、海に向こうには違う国があること

言葉の数、人種、文化の違い

武術の事…

紫貴の体はまだ出来上がっていなかった

旅の途中では氣の使い方や武術に関する話を聞いただけであつた

日本を周った間の話は必要なら今後出てくるかもしれないが…

旅の途中で師禅が紫貴の目：瞳の力に気が付き、相手の技や力、努力をすべて破壊してしまう力がある事から『破幻の瞳』と名づけたしかし師禅はこの話を紫貴にはなすのは紫貴が大きくなり、自分で気が付くまで黙っている事にした

「…相手の技を真似できると言う事は…相手が技を発動するとき、相手の氣の練り方、量、氣の流れ方、タイミング、どのような技なのか理解して目で見えていると言う事だ」

紫貴の前で氣の使い方の見本を見せた時に気が付いた師禅

「1～2回で完璧に理解して出来てしまつておる…その内自分で技を考えてしまいそうだな…理解した技の対策も完璧だ…今はまだ幼く相手の動きに付いていけないが…大人になつたら…紫貴は武人にとつてまさに鬼門だな」

それでも紫貴は一般人の大人よりも断じて早く動く事が出来る

「…まずいな、武人を引退した私が大人になつた紫貴と戦いたいと思つておる…いや、私だけではない…この今の世は武術が基本となつておる、大人になつた紫貴をはたして世間が黙つて置いておくものか…私も影で鍛錬するかな…紫貴が大人になる前に抜かれそうだな…」

「師禅、氣の流れは大体できたぞ？次は？」

「…ああ、よし、次は氣でなにができるのかを教えよう…まずはな…」

「…だが…紫貴が嫌がるかもしれんな…それは紫貴が考える事か…無理強いはしまい…」

こうして紫貴は師禅の教えを受け、国を周った

数年たち、師禅の自宅につき
そこが紫貴の家にもなった
紫貴は成長したここ数年だけでも
それでも紫貴の人間嫌いに近い人見知りには治る事はなかった
自宅でも家の敷地内に引きこもり
ほとんど外に出ようとしなかった
紫貴は武術を生き方とは選ばず
極めようとはしなかった
紫貴自身が強くなりたいと思わなかったので
戦いたいとは思わず
百代のように戦いに飢えるという衝動もせず
毎日をなにかを知る事に時間を使った
そんな中、時間が流れた・・・

刻は戻る・・・

「・・・で、師禅が病で亡くなり、今にいたると・・・」
川神院、道場、人影は四人
話をしていた黒峰紫貴
話を聞いていた

川神院、総代であり、昔からの師禅の親友であった川神鉄心
川神鉄心の孫であり、紫貴を舎弟とし、弟とした川神百代
… たまたま居合わせた川神院、師範代、ルー・イーである
… アレ？私の扱いが雑？

・・・その三人に過去の話をした紫貴であった
「・・・こんな感じか？」

ふうと息を吐く紫貴、無理もない3〜4時間以上は喋っている

三人は

「……」

黙ったままであった

「……なにか質問は？」

紫貴が問う

「……だ」

百代が小さく言葉を発した

「？」

紫貴が百代を見る

鉄心とルーも百代を見た

「なんだ！？それは！！」

百代が怒鳴る……

「……どうした？……やはり俺の存在が許せないか？無理もない、武人からしたら俺は完全にふざけた存在だ……百代が怒りを感じるのも……」

百代が自分に怒りを感じていると考えた紫貴

百代が立ち上がった

「ふざけやがって！許せん！」

百代は怒っている、いや百代だけではない

「……落ち着けモモ……気持ちわかる」

「……そうネ、落ち着きなさい百代」

鉄心もルーも怒っていた、言葉にしなくてもわかるほどに……

「……そうだ、落ち着け百代、俺が消えれば問題は……」

ここから去る、紫貴はそう考えていた

「許せるものか！……そんな村、地図から物理的に消してやる！」

「！」

「……は？」

紫貴は百代がなにに怒っているのか理解できなかった

「……シキ！その村はどこだ！私が滅ぼしてやる！」

「……落ち着けというところじゃろうが！モモ」

「……鉄心さんも落ち着いて下さい」

百代が今にも暴れそうなので
二人が止める

そんな三人を見ていた紫貴は

「……………」

茫然としていた

「だって許せんだろ！私の弟に対して！」

話に出てきた村人たちに対して百代は怒っているようだ

「…百代は…なぜ、村人に対して怒っているんだ？」

紫貴の言葉に百代が反応する

「だってありえないだろう！たしかに話だけでは詳しくは知る事は
できないが…五歳児が死ぬ環境なんて！間違ってる！」

百代が叫ぶ

「…いや、それは俺に問題があつたから…」

あくまでも俺が悪い…化け物だつたから

紫貴は思う…自分が追われるのは自分が普通ではなかったからだ

…自分でも認識しているし、村人も間違えているとは思わない

別にもう村に対して関心はないが…

「シキに問題なんてない！別にシキはなにもしてないんだろう！？」

たしかに紫貴が村を襲つた訳でも人を傷つけた訳でもない

「…人間は自分と違う存在を…自分の認識や理論がつかないものに
恐怖し、許せない生き物だ、常識からかけ離れていた俺が悪いのだ
からしかたが…!？」

しかたがない…

紫貴がそう言いきる前に

百代の拳が紫貴を襲つた…

「…すまない、無意識でつい」

「……………」

…ちなみに上のセリフが紫貴、下が百代である

「…なんで襲われた紫貴君が襲つたモモに謝っておるんじゃ？」

「…凄いパンチだったネ、私なら当たってたヨ」

会話の途中で本来ならこない攻撃
話していた紫貴が無意識に百代の攻撃を避けたのだ

「ごほん：あーあれだ、ふざけた事いうなよ？シキ…」

冷たい空気の中、百代がさきほどの続きを始めた

「・・・なにがだ？恐怖の定義がか？俺の持論に異議があるなら百代の持論を聞こう」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

紫貴以外の三人が固まった

もちろん紫貴は本気で言っている

「・・・？どうした？」

紫貴はきよとんとしている

「：紫貴君、モモはお主が自分自身を悪いと言っているのに対して言ったのだ：ワシもルーもそう思っている」

「そうネ、紫貴君が悪い所はないヨ」

鉄心の言葉にルーも同意した

「：なぜだ？」

人間は自分と違うものが恐ろしい

得体のしれないものは遠ざけるか：消す

そうしたいと願うのが人間であり、自分はその対象であった

だから村人から追われた

そう考える

・・・それが間違えている？

・・・なにがだ？全部か？

・・・理解できない

・・・答えを知りたい

紫貴は混乱する

そこに百代も続く

「そうだ！自分が他と違うから自分が悪い？だから襲われても問題

ない?・・・ふざけるなよ!?それに・・・こそ!」
言葉がまとまっていけないのだろう

そう叫ぶと百代は道場の西門から飛び出して行った
百代の目には涙が溜まっていたのが見えた

気が付いたのは肉親である鉄心と・・・

正面にいて会話をしていた紫貴だけだ

「ン?百代はどうしたのだろうか?」

ルーが首を傾げる

「…珍しいのう」

鉄心が百代の涙を見たのは子どもの時以来だった

「・・・で、これからどうすればいい?」

紫貴が問う

「・・・もうそろそろ朝になるぞい、続きは明日だ、ルー、すまぬ
が紫貴君を客間に案内してくれんかの」

百代と鉄心の勝負の時、開けた天井の穴からは白みかかった夜空が
見えた

「了解しました、紫貴君こっちだヨ」

「・・・」

紫貴は西門を見てから道場の東門から出て行った

そうして道場には鉄心一人だけが残った

「…これはなかなか難しい問題が山積みじゃの…一番の問題は紫貴
君が問題を問題と認識していないこと…ちがうな、自分の事を軽く
見ている事が…」

昔の話をする時、紫貴は最初から最後まで淡々と話した

話の中の紫貴は楽しんだり…苦しんだりしていたが

話をしている紫貴からは感情が感じられなかった

ただ紙に書いてある文をただ読んでいるだけ・・・

まるで他人の日記を興味がないように読んでいただけのようであった
普通の人は自分の苦しい過去の話をするときに

自分が苦しむ原因となったものに怒りや怨みを抱くものだ

紫貴にはそれがまったく見られなかった

襲われ、諦め、死にそうになり、師禅と出会い、学び、家族ができた
苦しんだり、喜んだり、怒ったり、悲しんだり、楽しんだり
沢山の事があつた過去を話すのだ

話をしていた紫貴の表情には、喜怒哀楽が無さ過ぎた

「…師禅は紫貴君をぎりぎり人間にするのがやっとなつたようだな

…後はワシにまかせて安心して眠れ、親友…」
壊れた屋根から空をみる鉄心

「…で？いつまでそこにいるつもりじゃ？」

鉄心がそう言うのと西門から百代が入ってきた

「…なんでわかつた？じじい…」

気配を消していたのに気が付かれたので不満そうであった

涙はなかつたが若干目を赤く充血させている百代

「…いや、モモの気配の消し方は完璧じゃつたぞ…ワシでも気が付
かんかつたわい」

「…ならどうしてだ？」

鉄心の言葉に疑問を抱く百代

「…なに、ワシは気が付かんかつたが紫貴君は気づいておつたぞ」

紫貴は道場から出て行く時、ふっと西門を見ていた

なにも言わないで自分も出ていったが紫貴には百代だと認識していた

「…紫貴君の実力はわからんかつたが…ワシやモモよりも氣の使い
方は上じゃな」

鉄心の言葉が納得できるのかなにも言わない百代

「まあよい、話の続きは明日じゃ…もう寝なさいモモ」

鉄心の言葉に頷く百代

そのまま西門と東門から出て行くこととする二人

百代の足が止まった

「…あれ？」

「…どうしたんじゃ？」

百代のほうを見る鉄心

「じじい……」

百代の様子がおかしい

「……なんじゃ？」

百代の口から小さな疑問が出てきた

「……シキ、今日、なにか食べたか？」

「……あ」

朝に紫貴が到着

そのまま百代とバトル

紫貴、重症

半日寝込む

起きてそのまま鉄心の部屋へ

部屋の掃除

そして道場へ

百代と鉄心のバトル

紫貴の過去の話

話が終わり

現在夜明けだ

自分たちは紫貴が起ころ少し前に食事を取った

だが紫貴は取っていない

紫貴が住んでいた師禅の家がどこにあるかはわからないが

へたしたら紫貴は朝食すら取っていない可能性すらある

軽く24時間以上食事も水分取っていない…確実に朝から何も口に

入っていないのだ

「……」

今日一日ひたすら紫貴を引っ張りまわした二人

「…紫貴君に聞いてこよう…水分だけでも取らせなくては…」

鉄心は速足で紫貴のいる客間へ向かった

紫貴は出血すらしていたのだ

それなのに3〜4時間はひたすら喋らせた
飲まず食わずで・・・

「瞬間回復は細胞を活性化させて傷を癒す…私はもうなれたがあれは腹減って疲れるんだよな・・・シキに嫌われた!？」

一日中引つ張り回した張本人である百代

急いで紫貴の下へ向かおうと思ったが・・・

「・・・どんな顔してシキにあえばいいんだ？」

道場での紫貴との関わりを思い出した

「・・・会話の途中で出て行ってしまったしな、涙を見られないようにとはいえ・・・姉失格ではないか」

百代は誰もいない道場で一人、悶えていた・・・

ちなみに紫貴にはしっかりと百代の涙は見えていたのだが
それは紫貴しか知らない事だ

こうして、黒峰紫貴の長い一日が終わった・・・

13章 紫貴と師禅 過去 其の肆（後書き）

はい、過去編終了です

しかも紫貴の事は全然謎のままっていう…

過去話に意味ねえ…

これからどうするか…

無計画の思いつきで書いております

では、次回に続く…（笑）

13章外伝 まだ明けぬ夜（前書き）

これは13章の後のはなしです

字の間違いなどがあった場合は
指摘をよろしく願います

13章外伝 まだ明けぬ夜

これは紫貴の過去の話の後、部屋に戻った後の話である

ルーの案内の下、客間に案内された紫貴、そこには布団と寝間着が用意されていた

その部屋には紫貴一人が立っていた

「…少し腹が空いたな…そういえ今日はなにも口に入れていなかった…」

紫貴は自分が持っていた黒色の布袋を開ける、中には着物が一着、財布、通帳と印鑑、カロリー イト、だけあった

「…飲み物が欲しいな…空腹はどうにかなっても水分は欲しい…買ってくるか？」

幼い頃から最低限の食事で済ませてきた紫貴、金は師禅が残した遺産があったが、

紫貴には基本欲がなく、たいして金を使うということをしなかった

「…」

ここに来た時に着ていた着物は百代との勝負でもう着られなくなっていた

あの黒色の着物は結構高価だったもので、生前師禅が誕生日に買ってくれた物だ

紫貴も結構気にしていたのだが

それを台無しにした百代に怒りや不満はなかった

「…勝負を受けたのは俺だし、形ある物はいずれ壊れるものだ…物も人間も同じ…あの着物の寿命が今日だっただけの話だ…」

そんな事を考えていると部屋の戸がノックされる音が聞こえた

「紫貴君や、まだ起きておるかの？」

鉄心の声が聞こえる、紫貴は無言で戸を開けた

「おお、起きておったか」

鉄心が戸の前に立っていた

「…」

紫貴は無言のままだ

「…紫貴君、無言は怖いのだが…まあいい、紫貴君先ほど気づいたのじゃが今日は飲まず食わずじゃったろ？こんな時間じゃ、食べ物を用意出来なかったが飲み物だけは用意した…食事は朝食まで待てるかの？」

そういいながら鉄心はペットボトルに入った水を紫貴に差し出した
紫貴は水を受け取った

「…食事は自分で確保するので用意して貰わなくて構わない…とりあえずありがとうございます」

そう言つて紫貴は軽く頭を下げた
それを見た鉄心は軽く驚いていた

「…その態度からするとワシは紫貴君に認められたということか？」

心なしか嬉しそうな鉄心である

「…とりあえず川神市にいる間は師禅の遺言通り、川神鉄心の指示に従つと考えて貰つて構わない…」

紫貴の言葉に頷く鉄心

「うむ、了解したのじゃ…して紫貴君、紫貴君の身の振り方は明日、詳しく話し合うつつもりじゃがなにか要望はないかの？ワシを師禅と思つて言つてくれてかまわんぞ」

鉄心は自分を祖父と思つてかまわない、そう言っているのだろう
誰も人のかわりにはなれない、そう思つた紫貴であったが

あえて黙る事にした

「…では俺の事は呼び捨てでかまわない…師禅はそうだった…」
紫貴の言葉を聞いて微笑む鉄心

「わかつたぞい紫貴…してなにかあるかの？」

鉄心の言葉に紫貴が答える

「…では少しだけ…俺は武人ではない…よって鍛錬も稽古もしない…後はこの川神院は落ち着かないので住む所はこの敷地外を望む…以上だ」

紫貴の言葉に頷く鉄心

「…了解した、もともとここ、川神院は己を高めようとする者が集まり鍛錬を行う場所…それを望まぬ者に無理強いはせんよ…最初は紫貴をここ川神院に住まわすつもりじゃったが…わかったぞい、紫貴が住む場所はこちらで手配しよう…」

鉄心が快く承諾したので少し安心した紫貴

「…すまないな…それ以外は特にならない…鉄心の指示に従う」

紫貴の言葉に頷く鉄心

「いや、かまわんよ…では詳しくは明日な…朝食は本当に良いのか？遠慮はいらんぞ？」

鉄心の言葉に紫貴は

「…別に遠慮している訳ではない…鉄心が命じるなら食べるが基本、摂取するものは自分で用意したいだけだ」

これは紫貴が他の他人が用意した物に抵抗があるからである

これまでは師禅と共にいた訳だが、自分の事は自分でしてきた紫貴であつた…

「…まあ、紫貴がそうしたいと言うならなにも言わんよ…では長くなってスマンの…これで失礼しようかの」

そう言つて去ろうとする鉄心

「…鉄心」

紫貴が呼び止める

「なんじゃ？」

紫貴の声に振り向く鉄心

「…一つだけいいか？」

「…言つてみなさい」

紫貴が鉄心に問う

「…鉄心が部屋に来た時から気になっていたのだが…」
そう言つて紫貴は廊下の先の曲り角を見た

「…あんな遠くで俺の義姉殿はなにをしている？」

紫貴の言葉を聞いて鉄心も廊下の先の曲り角を見る、そこには誰も見えないのだが…

「…気がついておつたか…流石じゃの…モモが、今日紫貴がなにも口にしていない事に気がついたのじゃが…さっきの事で顔を合わせにくいようじゃな…あんなモモは久々に見るわい」

そう言いながらホッホッと笑う鉄心

その言葉に紫貴は

「…俺に涙を見せた事か？…まあプライドが高そうだしな…」

紫貴の言葉に若干苦笑いになる鉄心

「モモは涙を見せまいとして飛び出して行った事を恥んでおるんじやが…しっかり紫貴に見られておるのう…そして紫貴はやっぱり鈍感じゃし…モモも苦労しそうじゃ…」

孫娘を憐れむ鉄心

「…少し違うと思うんじやが…まあいいわい、ではお休み、紫貴」

「…？お休み…それと…百代に伝えてくれ、昼間は看病ありがとう、早く眠れとな」

そう言つて紫貴は部屋の戸を閉めた

それを確認した鉄心は

「…紫貴がどういふ人物か理解できるまで時間がかかりそうじゃ…」
そう言つて鉄心は百代のいるほうへ歩いて行った

紫貴がいる部屋から少し離れた廊下の曲り角には百代は一人うろつろしていた

「…やはりシキに会いに行くべきか…しかし嫌われていたら私は…」
紫貴に勝負とは言え、会つた瞬間に大怪我を負わせ、一日引っ張り

まわし、

話の途中でいなくなった事でシキに嫌われたのではないかと不安になっ
ていた百代であった

「…いつまでそうしているつもりじゃ？モモ…」

「！？…ジジイ…」

百代が悩んでいる内に話を終わらせた鉄心が隣にやってきていた

「モモ…紫貴にモモがここにいるのはバレておったぞ？」

鉄心の言葉に動揺する百代

「な…なに！？…て言うかシキを呼び捨て！？」

鉄心の紫貴の呼び方に気がつく百代

「…紫貴に呼び捨てで良いと言われての…どうにか認められた様じ
やわい」

ホッホッホと嬉しそうに話す鉄心

悔しそうにする百代

「…そういえばモモ、これから紫貴とどう関わるつもりじゃ？」

鉄心が真剣になり百代に聞く

「…どうって…姉として接していくさ…」

鉄心が急に真剣になったのを察した百代が答える

「…できるのか？…わかってるだろう？紫貴は直江と同じ様には
いかんぞ？」

「…わかっているさ…シキはまだ完全には私に対して心を開いてい
ない…姉弟関係も勝負の話がなかったら絶対に結ばなかっただろう
しな…」

百代の言葉に頷く鉄心

「うむ…あの子は不思議な子じゃ…心の中の壁がありすぎて何を考
えているのか全く把握できん…わかるのは自分の発した言葉には責
任を持つてるといことぐらいじゃ…」

「？なにを言っているジジイ…たしかにシキの心の闇が深すぎて考
えが読めんが…」

鉄心の言葉がよく理解できない百代

「なんじゃ、わからんのか？…勝負のルール、聞くかぎりではお主…かなり悪たらしいルールにしたな？お主らしくもない…」
勝った方が負けた方の言う事を聞く…

普段の百代ならば絶対に言わないし考えもしない事だ

「…昨日大和が使っていた話術だ…面白かったから使ってみた…」
百代はばつが悪そうに答えた

「…また直江か…彼は戦略の才があるのだがな…そういう訳だったか…つまりじゃな…モモの出したルールを紫貴が破ればそれまでじゃ…学校の生徒同士の決闘ならばワシの管轄の下、約束を反故にはさせませんが今回は違う…しよせんただの口約束じゃ」

鉄心の言葉に動揺する百代

「…しかし武士として勝負の約束を…」
百代が鉄心に反論しようとするが…

「そこから間違えておるのじゃ…紫貴は武士でも武術家でもないと言っていた…あくまでも戦う力を持った一般人じゃ」

鉄心がそれを否定する

「………」

なにも言えなくなる百代

「……しかし、紫貴はモモの卑怯とも言える約束を自分が事前に承諾したからと文句一つ言わず反故にもしなかった…そこからわかるのが紫貴は自分で承諾した事には責任を持ち約束を破らん人間だと言える…あくまでワシの推測じゃがな…」

鉄心の言葉に納得してしまふ百代がいた

「…ともかく紫貴を知るにはかなりの時間が必要だろう…そしてワシの考えでは紫貴に今必要なものは信じ合える仲間だろう…あの子にはこれまでにそれを作る環境ときっかけがなかった…じゃからワシが作る」

鉄心の言葉に

「…どうするんだ？ジジイ？……！？…まさか…」
なにかを悟った百代

「そうじゃ…紫貴を学校に…川神学園に入れようと思う」

「…こんな中途半端な時期にか？…オマケにシキはこれまでに学校には行っていないかったのだぞ？」

疑問を抱く百代

「うむ、じゃから入学ではなく転入じゃ…なに、ようは紫貴に高校に入れる学力があればいいのじゃ…まあワシに任せるのじゃな…」

鉄心の言葉に

「…色々と問題があると思うが…まあ私立だしジジイが学長だからいいか…なら私がする事は学校でシキの面倒を見る事だな」

百代の言葉に鉄心は

「…まあそうじゃな…紫貴は学校には行った事がないであろうし右も左もわからんじやろ…誰かの助けは必要だ…しかし…」

鉄心は百代を見た

「…かなり心配じゃの…モモが紫貴の面倒を見るか…モモが紫貴に面倒をかけそうじゃ…かなり心配じゃ…」

鉄心はかなり心配していた

「…二回も言うなジジイ！私はシキの姉だぞ！…それにシキが一番心を開いているのは私だぞ！…多分！」

叫ぶ百代

「大声を出すでない…何時だと思っておる…わかっているわい、モモに任せる…その前に紫貴に話すのが先じゃ…ワシ等が盛り上がりつつも仕方がないわい…」

そのような会話をしている二人は今の時刻を思い出す

「…しまった…夜が明けそうじゃ」

「…そろそろ起きだす奴もいる時間だぞ…ワン子も新聞配達の間だ…」

完全に夜明けである、二人は部屋に戻る事にした

「日付が変わって日曜か…学校がなくて助かったぞ」

「…モモ、昼過ぎまで寝るなよ？」

「うるさいジジイ…わかっているさ…お休み」

「お休みじゃ…モモ」

こうして二人は自分の部屋に戻る事にした

「…そうじゃ忘れておった…モモ」

鉄心の言葉に振り向く百代

「…なんだジジイ…そろそろ寝ないと真剣で不味いぞ」

「紫貴からの伝言じゃ」

「!？」

紫貴から…その言葉に反応する百代

「先に言えジジイ!なんだ!?!やっぱり怒っていたか!?!」

また怒鳴る百代

「じゃから大声を出すなと言っておるだろ!?!違うわい…『昼間は

看病ありがとう、早く眠れ』…じゃ」

鉄心の言葉に喜ぶ百代

「…よかった…怒ってないのか…本人から直接聞きたかった…」

百代の言葉にむっとする鉄心

「…現金な奴じゃ…そういうえば道場でモモが飛び出して行った時、

紫貴はモモの涙をしつかりと見ておったぞ?」

鉄心の言葉に固まる百代

「…見られてた…何のために飛び出したのだ私は…」

「無駄骨じゃな…」

「黙れ!ジジイ!!!」

「大声を出すなと言っておるじゃろ!」

「うるさい!ジジイも十分に大声だろ!」

「なんじゃと!」

「なんだよ!」

こうして時間が過ぎていき

二人は寝るのが遅くなり

起きるのが昼過ぎになったという

この二人のやり取りは当然、紫貴は知る由もなかった…

13章外伝 まだ明けぬ夜（後書き）

これからどういいう流れに持っていくか…
問題が山積みです

紫貴の住まいをどうするか・・・
学校ではどの時期に合流させるか…
原作にあわせるか
アニメにあわせるか
オリジナルのご都合主義でいくか
全部混ぜてのいいところ取りか

少し考えるので
もしかしたら
少し時間がかかるかもしれません

では…

14章 川神市の日曜日(前書き)

かなり短いです

14章 川神市の日曜日

川神市、日曜日の朝：

この町に住む者たちには普段と変わらずのいつもの日曜日の朝であった：

しかし、ここ川神院では違っていた

昨日一日、川神院での出来事はこの住人たちには詳しくは知らされていなかった

内容を知っているのは

この川神院総代、師範の川神鉄心

川神院拳法師範代、ルー・イー

川神鉄心の孫娘であり、次期総代の川神百代

そして皆には詳しくは知れされていない人物、鉄心の客人とだけ言い聞かされている

紫色の瞳を持つ青年、だけであつた：

川神院の門弟たちは疑問に思った

現状を見れば院の門の壁が破壊されており無くなっているのだ

門弟の修行僧たちは皆、師範であり総代である鉄心に理由と訳を求めた

しかし鉄心の返答の言葉は

『これは少し百代が暴走した、理由は詳しくは言えぬ』

ただそれだけであつた

院の中では噂が流れた：

あの門の壁は百代殿が勝負を行った結果である

百代殿がいつもの通りに挑戦者と戦った結果、百代殿が加減を間違えた

その対戦相手は重体であり、今は院の客間で休んでいる

そんな噂であつた、門弟たちは

加減を間違えるのは珍しいがあつたの百代殿である、ありえない話では

ない

あの武神と言われている百代殿と戦ったのだ、重体も領ける

あの百代殿が加減を間違えたのだ、相手は生きているのが奇跡

あの百代殿との勝負で重体なのだ、相手はしばらくは意識を取り戻さないだろう

…なんだ、いつものことではないか

修行僧たちは次々に納得し、さらに詳しくの追求をせず

門の前の片付けを行い、それぞれがいつもの一日に戻って行った…

…一人を残して

茶髪のポニーテールで元気が取り柄の女の子

川神家の養女で百代の義妹

川神一子…通称、ワン子である

…なにかへんね…お姉様もおじいちゃんもルー師範代も…院の皆に内緒なんて…それに…

ワン子が思い出すのは昨日の昼間の事である…

…お姉様と戦って重傷だって言われている人…昨日の男の人よね…
？

昨日の昼間、百代を探して院の客間に行ったワン子、そこで見たものは…

…
…
…

とたんに顔を真っ赤にするワン子

…お…お姉様…私の知らない男の人と一緒に寝ていたわ…
あわわわとその場で首を振るワン子…だが

…でも、あんな事を大和以外の男の人にするなんて…初めてだわ…
…

昨日の姉の行動を不信に思うワン子

姉である百代は普段、美人の女の人を見ると、目の色を変えて口説きにかかる程の美人好きである

本人からすれば『別に私は根っからの女好きって訳ではなく、魅力的な男性がいらないから美人の女に走るだけだ』…との事だが、ワン

子だけではなく他の人物が百代を見ても答えは一致の『川神百代は女好き』である

そんな訳で百代は男性には興味を持たず、ファミリーの男性陣以外の男には実力を持った男性以外、見る気も起こさない…

そして、ファミリーの男にも気を許してはいるが、百代からのアプローチはない

…一人を除いては…

それが同じファミリーの仲間であり、百代の舎弟である、直江大和である

百代は大和を気にしている、大和以外の男性には

相手がどんなに強くても、百代からボディタッチのようなコミュニケーションをとることはない、ましては同じ布団で寝るなんてそれこそ大和だけである

そんな大和相手でも百代は悪戯で同じ布団に入って大和をからかうぐらいしかない

所詮悪戯の遊びである

それは大和本人や仲間を始め、周囲皆が承知の事であり、

ワン子も当然承知の上である…しかし…

…お姉様…眠っていたわ…知らない男性の布団の中で…

ワン子は詳しい事情を知らない…同じ布団で寝ている二人を見て速攻で逃げ出したからだ…

それでも納得がいけないワン子である

普段見ている姉からは信じられない…知らない男性の布団で眠り

自分が部屋に入った事も気が付かないほどに熟睡していた

つまり、大和や仲間以外の人を信用し、安心していたということだ恐らくはその日、初めて出会ったであろう相手にだ…

あの川神百代であり、普段からずっと一緒にいた姉がだ…

…考えられない

……どういふ事？わからないわ…あのお姉様が大和以外の男と…なぜ？どうして？…

ぐぬぬ…と頭を抱え考え込むワン子

やがてワン子の頭がオーバーヒートをおこし、ショートした

「…にゅ〜駄目ね、わからないわ〜」

普段からあまり考えて行動を行うとということをしてしないワン子には
答えを見つける事ができなかった…

ワン子が昨日、川原の傍で鍛錬を行い

院に帰ってきたら門の壁が綺麗に壊れ、無くなっていた

周りにいた僧の人たちに聞いたら

どうやら自分の姉が原因らしく

本人に聞こうとして客間に向かったら

あの衝撃の現場である

パニックになり部屋を飛び出したせいでその日は聞く事ができず

朝はバイトがあったため、帰ってきたら聞こうと思っていた

新聞配達のバイトを終えてワン子が帰ってきたら

百代と鉄心はまだ起きておらず、今にいたった訳である

「どうしたらいいかしら…？あの男の人にいきなり聞く訳にはい
かないし…」

いくらワン子が誰とでも会話を行えるとしても

初対面の男性にいきなり

お姉様との関係は？

などと聞く訳にはいかない

やはり聞くならば

百代か鉄心である

「おじいちゃんとお姉様、いつになったら起きるのかしら？お姉様
はともかくおじいちゃんまで起きないなんてめずらしいわ…」

基本休日でも朝は早い鉄心である

朝食の時間になっても起きてこないのは珍しい事である

二人が起きてくるのを待ったため、廊下をぶらぶらしているワン子

「お姉様たちが起きるまでどうしてようかしら…昼の鍛錬には時間
があるし…あら？」

考え事をしていたワン子が玄関の近くに見慣れない人影を見る

「あれは…昨日のお客様？」

ワン子が見た人物はワン子が今、一番気になっていた男性、黒峰紫貴、本人である

「あの人は…お姉様と同じ布団で寝ていた人？…出かけるのかしら？」

ワン子が見ているなか、紫貴は玄関から出て行った

「……、よし！」

ワン子は何かを考えた後

玄関へ向かっていく

どうやら紫貴に付いていくようだ…

「どんな人なのかお姉様たちに聞く前に自分で見てみようっ」と…」

ワン子は紫貴の尾行を行う事にした

「ある程度自分の目で相手を知らなきゃね…ちょっと怖いけど…勇往邁進！」

小さくガッツポーズをすると

ワン子は紫貴を追いかけて

玄関から出ていった…

14章 川神市の日曜日（後書き）

リアル日常が忙しい
でも時間を見つけては
少しづつ書きます

…ワン子ってこういうキャラだっけ？
書いてみてわかった事は
作者はキャラを再現する事が苦手であった…
ワン子だけでなく
この先で出てくる人物も
違和感かなり出てくるかもしれません
謝罪しておきます

15章 紫貴と日曜日 小さく交わる道筋(前書き)

ごめんなさい

いろいろとごめんなさい

ご都合主義

炸裂させます・・・

15章 紫貴と日曜日 小さく交わる道筋

川神市の日曜日の朝

川神院の客間で黒峰紫貴が眠りから目を覚ました

「・・・朝」

体を起こすとその場で立ち上りコキツと肩の関節を鳴らした

「今何時だ？寝たのが遅かったからな」

遅いなんてものではなく、寝たのは、ほぼ朝に近く

現在七時頃…紫貴は三時間も睡眠はとっていない

当然まだ眠気はあるが、この空気…

川神院の雰囲気に着かず熟睡できない紫貴

起きる事にした

部屋には時間がわかるものはなく、紫貴も時計は持っていない

「大体七、八時頃って所か？流石に鉄心も百代も起きていない

だろう」

昨晚、紫貴と別れた鉄心が寝たのが自分よりも後だから

まだ眠っているだろうと考える紫貴

・・・実は鉄心と百代が寝たのはついさっきの事なのだが

そんなことは知らない紫貴

これからどうするか考える

「昨日は一日潰れたからな…なにも用意していないぞ」

身に着けるもの以外、ほぼ手ぶらの紫貴であった

紫貴の予定では昨日、朝に川神院に来てから

自分の今後を決め、川神鉄心に納得できなければ

師禅の自宅に帰り、ここ川神市に住むのならば

生活用品を買いに行くつもりであった

しかし、百代の介入で

紫貴の予定はいきなり終わりを告げた…

「タオルも歯ブラシもないぞ…買いに行くか」

師禪が紫貴に幼い頃から清潔面でしたっけと言いつつ聞いていたのだから、そこらへんは毎日しつかりとしていた紫貴。予備の着物に着替えた紫貴。

「…ついでに朝飯と衣類も買いに行くか？」

そう思いながら紫貴は無言で部屋を出ていった。

部屋を出て廊下を歩いていると

一人の修行僧に出会った。

「…おや？おはようございます。」

川神院の門弟が綺麗に頭を下げた。

「……………」

それを無言で見ている紫貴。

「…昨日はどうも…鉄心総代から客人とだけ聞かされています…まだ鉄心総代と百代殿は起床されていませんが…どこかへお出かけですか？」

昨日、川神院へ来た紫貴と門の入口で出会い鉄心に手紙を届けた門弟であった。

「…買い物。」

ただ一言だけ、紫貴はそう言つと門弟の横を通りすぎようとす。

「買い物でしたらここ川神院からまっすぐ進んで行く所にある商店街に行くといいでしょう…たいていの物はそこで買えるはずですよ。」

門弟の言葉を聞いた紫貴が一瞬だけ止まると

「……………」

ボソツと呟くと紫貴はまた歩き出した。

「お気をつけて。」

門弟の言葉が後ろから聞こえるが、紫貴は反応せずそのまま玄関へ向かつて行った。

その紫貴の後ろ姿を黙って見ていた門弟。

「…あの門の壁が吹き飛ぶ程の攻撃を百代殿から受けたと聞いていたが…」

普通に歩いている紫貴をみる…

「…深くは考えまい…」
八八八と小さく笑うと顔をひきつらせたまま門弟は歩きだした
そうして紫貴が少し歩くと院の玄関に到着し、商店街を目指して歩
き出した

しばらく歩くと紫貴は商店街に到着した
日曜日の朝、商店街は賑わいを見せていた
それを見た紫貴の感想は…

「…やはり人が多いな…」
ハアとため息をつくると紫貴は近くのコンビニへ入った

紫貴はキヨロキヨロと辺りを見回し、水とサンドイッチ、歯磨きセ
ット（歯ブラシ・小さいコップ・小さい歯磨き粉・手ぬぐい付）を
買うとすぐに店を出た…

コンビニ袋を持った紫貴はそのまま衣類を扱っている店を探す
紫貴は商店街を歩いてみると

「…うざいな…」
商店街は現在人が多い、いくら日曜だからだとしても多すぎるぐ
らいだ

紫貴は知らないが現在、川神市ではとある事情で普段より人が多い
のだが

昨日、川神市に來た紫貴は知らない
人ごみを避けながら店を探した
少し歩くと目的の店を発見した

「…さすがに着物は置いてないよな…動きやすいのでいいか…」
紫貴はこれからの事を考え、動きやすい衣類を選ぶ事にした
自分にあったサイズのGパン、Tシャツ、上着を買つと
すぐに店を出た

紫貴はすぐに川神院に戻ろうと思ったが
紫貴の目の前には商店街の入口があった

商店街の入口から川神院まで一本道なのだが

今日は人が多く、人ごみを嫌う紫貴は遠回りをして院へ向かう事にした

「…河原の前を通っていくか…」

紫貴はそのまま商店街を出て、川原の方へ歩いて行った

途中で紫貴は

「…そういえば商店街に入る前から感じていた視線と気配が消えたな…どうでもいいか…」

紫貴はあまり関心を持たずにそのまま歩いて行った

紫貴は川原へ歩いていると、途中で川神公園を見つけた

「公園：小さい子はこういった場所で遊ぶのか…」

紫貴は自分の幼い頃の事を思い出した…

もし自分がこの川神市で生まれていたら…

そんな考えが一瞬だけ紫貴の頭によぎった

「…なにをくだらない事を…行くか…」

紫貴は足を進めようとしたが公衆トイレが目に入った…

「…ここで済ませていくか…」

紫貴はトイレに入って行った

………。

少し時間がすぎると

トイレの中から着物姿ではなく

ブーツにGパン、シャツに上着を着た紫貴が出てきた

「…こんなものか…着物以外を着るのは久しぶりだな…」

手には川神院に来た時に持っていた黒色の布袋を持っていた

中身はコンビニで買った物と着替える前に来ていた着物が入ってい

る（紫貴は院を出る時に中身を身に着け、布袋は畳んで袖に入れていた）

「子どもが多いな…行くか…」

トイレで歯を磨き、顔を洗ってから着替えた紫貴

そのまま公園を後にした

しばらく歩いていると河原についた

「…誰もいないし、ここでいいか…」

普段ならば川神学園の生徒が歩いている時間帯

しかし今日は日曜日

おまけに人は皆、商店街にいるので

見渡すかぎり、人は紫貴一人だった

河原の土手に座った紫貴は朝食をとる事にした

「……………」

モグモグと川を見ながらサンドイッチを食べる紫貴

無事に食べ終わり、水を一口飲んだ紫貴は

ペットボトルとゴミを袋に入れ、その場で横になった

「…もう少しで昼か…流石に二人も起きたかな…」

紫貴は川神院にいるだろう鉄心と百代を思い出した

「…まあいいか…」

睡眠が極端に少なかった紫貴、そのまま目を閉じ眠りに入った

「……………」

普段なら仮眠などを取らない紫貴、しかし川神院の空気に馴染めず、まったく疲れがとれなかったので、誰もいない事を確認した後、眠りについた

時間は少し進み、昼過ぎ

「・・・うゝ疲れたゝねむいよゝ・・・zzz・・・」

眠りながら歩いているのは青髪で腰位の長さのストレートヘアの女性
…おまけに百代並みの巨乳である

「zzz・・・」

よるよると歩き今にも立ち止まりそうである

「…は！…うゝ家まで持たない…しかたない」

家に到着するまで持ちそうにない

そう考えた青髪の女性はいつもの所へ向かう

「…このままじゃ道の真ん中で熟睡しそう…いつものように河原へ
行くっ…」

青髪の女性は河原に到着した

「ついたゝ…オールで警備員の仕事なんて辛すぎるよ…立ちながら
寝てたけど…朝帰りならぬ昼帰りはねゝ…ねむい…」

寝よう…そう思った女性の目に先客が写る…紫貴である

「…どの辺で寝ようかなゝ…あれゝ？先客さん？」

紫貴の存在に気がつき、近づいていく

「珍しいなゝ私以外にここで寝てるなんて…」

普段はいない人物に興味を持った女性は紫貴の隣までくると
じーと顔を眺めていた…そして…

「・・・／／／」

急にポツと顔を赤らめる女性

「…うわゝなんだろゝカワイイ…構いたくなるような…守りたくな
るような…」

「・・・すゝ・・・すゝ・・・」

ただ眠り続けている紫貴

「…いい匂いだな…どうしようかな…そうだ！膝枕をしてあげようゝ
そう思った女性は紫貴にさらに近づく

そして後1メートルを切った所で

「…すゝ…すゝ…!?!?」(ピタッ！)

急に紫貴の呼吸が止まった

それと同時に女性もその場に止まった

「…駄目だ…これ以上近づいたら起きちゃう…」

そう思った女性は一歩だけ後ろに下がった

「……………す…す…」

また同じように紫貴の寝息が聞こえてきた

「…起こされるのは辛いよね…残念だけど…気持ちはわかるもん…」
ガクツと落ち込む女性

彼女の好きな事は寝る事、趣味も寝る事

とにかく寝る事が大好きなのである

だからわかる、これ以上自分が近づくと彼は起きてしまう…自分のせいで…

「…あんなに気持ちよさそうに寝てるのに起こしたら可哀そうだよ
ね…」

紫貴に膝枕をするのを諦める女性

落ち込みながら紫貴の1メートル離れた隣で自分も眠る事にした

「残念だな…私もねようっと…あれ？」

寝ようとした女性、ある物に気がつく

「…これはこの子の？…不用心だな…」

紫貴の隣…紫貴と女性の間においてある黒色の布袋…紫貴が持っていた荷物である

「も…誰かに持っていかれたら大変だよ…」

手を伸ばせば届く距離にある紫貴の荷物を女性は手を伸ばしてとる

「まったく不用心だな…私が持つてあげよう…ふわあ…」

荷物を抱きしめると自分がなにをに河原に来たのかを思い出した
女性

欠伸をすると女性は荷物を抱きしめたまま横になった

「…えへへ…おやすみなさ…い…」

「この子が起きた時にお話ができるといいな…名前はなんて…」
「…ZZZZ」

速攻で眠りにつく女性であった

本来ならば警戒心が高い紫貴
普段ならばすぐに起きるのだが
今はかなり眠りが深かった

女性は不用心だと言っていたが

普段の紫貴ならばすぐに気がついたのだ…

彼女のような微塵も邪気を待たない者ではなく
荷物や自身に邪な考えを持つ者だったなら…

そんな者が自身に近づこうものならば紫貴は
5メートルも近づかれないうちに飛び起きる

現在は多少落ち着き、少し鈍っているが

幼い頃、村にいた頃は寝込みを襲われた事は少なくなかった

戦いの後、気絶して強制的に睡眠を行っている時以外、師禅である
うが寝ている紫貴には触れる事は出来なかった

実際、紫貴に邪気どころか好感を持っていた青髪の女性…

彼女であっても…気配を消していても

紫貴には触れる事は出来なかったのである

…そんな事実をこの女性は知る由もなかった訳なのだが…
こうしてまた、少しだけ時間が進んだ…

「……………ん？」

パチツと目を開け、その場で身を起こす紫貴

「…鈍ったな…」

時間はもう少しで夕方、もう少しで暗くなる時間であった
いくら疲れていて睡眠不足であっても

こんな場所で熟睡していた自分に嫌気を感じていた
…くそ…死にたいのか…俺は…」

もちろん河原で寝ている人間をいきなり殺そうとする人間は
ここ川神市の…すくなくてもこの河原のそばにはいない
しかしそんなことは紫貴には関係がない

「…戻るか」

川神院に戻ろう…そう思った紫貴だが、違和感を覚えた

「…」

隣に置いてあった荷物が無いのだ…辺りを見回すと

「…ZZ…ZZ…」

荷物があつた…笑顔で寝ている青髪の女性つきで…

「…」

紫貴は無言で女性を見つめながら現状を考える

「…なぜ？…誰だ？…そしてどうして俺の荷物を抱き抱えて寝てい
る？」

紫貴は色々と驚いていた

自分と女性の距離が1メートル位…そこまで自分が近づかれていた
のに自身が反応できなかった事

「…気配が極端に薄い…素人ではないな…」

一般人ならば流石に眠っていても気がつける…

この距離まで近づかれたのはこの女が気配を消しているからだ…

完璧ではないが…

それよりも紫貴が気になっているのは…

「…なんで俺の荷物を大事そうに抱き締めているのだ？」

荷物の事である

見るからに熟睡しているのにもかかわらずしっかりと抱き締めて放
す様子はない

まるで自分の大切な物を守ろうとしているようだ…

理由を考える紫貴

盗ろうとしたのならこの場にいる訳はない

落し物だと思ったのか…持ち主が隣にいるのだ、そんな訳はない
寝ているこの女を起こして訳を聞けばいいのだが

もし面倒な女だったら嫌だ

「…どうする？」

おそらくは軽く引つ張る位じゃ離さないだろう
力づくで引つ張れば間違いないと起きるだろう

極力関わりたくないと考える紫貴

紫貴の中で出た答えは

「…まあ…いいか？」

無言のままその場を離れる紫貴

荷物を諦めるようだ

「…まあなくて困る物は入っていないからな？」

中身は齒磨きセット、ペットボトル、着物だ

財布などは身に着けていた

「…とにかく川神院に戻るか？」

荷物を抱えたまま眠る女性をそのままにして、その場から離れて
いった

「…もうすぐ夕方か…寝すぎたな？」

そのまま歩き続けて川神院に向けて歩く紫貴であった

しばらく歩いて川神院の前に到着した紫貴

その時、ふつと頭に一つの考えがよぎった

「あの女が俺の荷物を大切な物の様に抱えていた理由…俺の荷物を
守っていた？…俺の荷物が誰かに盗られない様に？」

右手で頭を軽くかきながらフツと鼻で笑い

「…まさかそんな訳がないか？」

川神院の門の所に一人の女性が立っていた

「やっと帰ってきたか！服装が違ったからわからなかったぞ！シキ
！似合っているじゃないか！…それにしても面白い物にしては遅すぎ
るぞ！」

紫貴の目の前で騒いでいる女性、川神百代を見ながら考える紫貴

「…百代のせいでお気楽な考えになったか？…まあ…もう会う事も
ないだろ？」

もし会う事があるなら理由位は聞いてもいいかな…
そんな事を考えながら紫貴は川神院に入っていった…

15章 紫貴と日曜日 小さく交わる道筋(後書き)

なんでワン子出てこないんだよ！

そう思われた方がいらっしやると思われます

なんでここでこのキャラが出てくるんだと

なんで簡単にフラグがたつんだよ

紫貴の反応おかしいだろ！？

…そう思われた方もいらっしやると思われます

ご都合主義です…

次回も読んで下さるとありがたいです

では・・・

16章 紫貴と日曜日 交わった道の先（前書き）

このキャラたちは今後しばらくは出てこないと思います
なぜこのキャラたちを出したかと言つと・・・

・・・紫貴に沢山の進む道を選ばせてあげたかったからです

・・・紫貴の為です

断じて作者がこのキャラたちのことが好きだからではありません

紫貴の為です

・・・今回は紫貴が出てきませんが...

16章 紫貴と日曜日 交わった道の先

これは紫貴が川神院に戻った後のおはなし・・・

夕暮れ：

河原の近くを二人の女性が歩いていた

「遅いな〜タツ姉：また河原で寝てるのかな・・・」

まだ幼さが残るオレンジ髪のスインテルの女の子

「まあそう言うもんじゃないよ天、辰も仕事で大変なんだ：天も働くようになったらわかることさね」

その姉の大人っぽい魅力を感じる、紫色のショートより少し長めの髪をした女性である

「ウチだって働ける歳になったら働くぜ！：いつまでもアミ姉たちに迷惑はかけられないからな！：それまでは遊ぶけど・・・」

「それは頼もしいねえ：まあ：家族なんだ迷惑なんて思ってないさ・・・」

仲が良さそうに歩く二人

「それはいいとして：ウチ腹減ったぜ：タツ姉がいないと晩飯にありつけないからな」

「だからこうして日が暮れる前に辰を迎えに来たんだろ・・・見つけた」

二人の目の前には河原の土手で寝ている三姉妹の一人、青髪の女性がいた

「やっぱり寝てたよ：しゃねーな〜タツ姉は・・・」

そう言っておレンジ髪の女の子は寝ている女性の下へ走って行った
「ZZZ・・・」

いまだに眠り続けている女性、隣まで走ってきた女の子が体を揺する
「ほら起きろタツ姉！帰るぞ〜」

「…ん〜？…あ〜天ちゃんだ〜おはよ〜」

目を擦りながら体を起こす青髪の女性

「珍しいねえ…辰がすぐ起きるなんて…」

紫色の髪の女性も隣にやってきた

「あ〜アミ姉だ〜おはよ〜」

にこやかに挨拶をする女性に微笑む姉と苦笑いの妹

「おはよう、辰」

「おはようつて…もうすぐ夜だぜタツ姉…それよりウチ腹減ったぜ、
はやく帰って晩飯作ってくれよ」

オレンジ髪の妹の言葉に微笑む女性

「あ〜うん、帰ったらすぐ作るね〜」

「あいかわらずだねえ辰は…ん？辰…その抱き締めているのはなん
だい？」

長女である紫色の髪をした女性が、次女である寝ていた女性がなに
かを抱き締めているのに気がつく

その言葉を聞いた次女は

「…あれ〜？」

自分の腕の中に昼間の子の荷物がある事に気がつく

「…なんでまだ持つてるんだろ〜…あの子は〜？」

キョロキョロと辺りを見回す次女

だが当然自分の姉妹しかこの場にはいない…

「本当だ！タツ姉！それおみやげか？食べ物か？」

期待の眼差しで次女を見るオレンジ髪の三女

「駄目だよー天ちゃん、これは人のなの！」

大事な物のように荷物を抱き締める次女

「人のつて…誰のだい？辰」

次女の言葉に疑問を抱く長女

「えーとねー…」

荷物の持ち主を告げようとする次女、しかし

「…わかんないや…名前どころか話すらしてないし…」

荷物の持ち主の情報をなにも知らない次女

「わかんないって…なんでそんな物を持つてるんだい？辰」

長女がさらに疑問を抱く

「えーと、昼間にね…」

次女は長女と三女に昼間の事を伝える

事情を聞いた二人は

「…なんだいそれは？その荷物の持ち主は荷物を置いて消えたって
事かい？…変な話だね…」

「開けてみようぜ！それでもって金目の物が入ってたら頂いちまおうぜ」

三女の言葉に次女は

「駄目だよ天ちゃん、そんな事したら私…怒るからね…」

いつも糸目だった次女がうつすらと目を開ける…それだけで三女は
動揺した

「じ…冗談だよタツ姉！？謝るからさ！？」

次女の反応を見て長女が

「…辰がそんな態度になるなんて…そんなにその男が気に入ったのかい？」

その言葉に次女は

「／／／／／／／」

顔を赤くしながらコクコクと頷いた

「…なんかね…不思議なんだ…私もよくわからないけど…あの子
を見てたら放っておけないというか…守ってあげたいっていうか…
こんな気持ちになったのは初めてなんだよね…今まで見た男の人に
は感じた事がない気持ちになってね…一緒にいたいと思った／／
／」

顔を赤らめたまま話す次女

「…変だよね私…今日初めて会って…会話すらしてないのに…こ

の気持ちはなんなんだろ…アミ姉わかる？」

自分の中に芽生えた新しい感情、それがなんなのかを姉に尋ねる次女
「…それは間違いない…恋ってやつさね辰…いままでどんな異性に
も関心がなかったのにねえ…」

妹の質問に対してすぐに答えがわかった長女…しかし…

「…さあてね…次にそいつにあつたらわかるんじゃないかい？…私
もそいつにあつてみたくなつたよ」

長女の言葉にコクンと頷く次女

「うん、アミ姉もきつと気にいるよ」

嬉しそうに笑顔になる次女

「よく話がわかんないけど…いい加減に帰ろっぜ、ウチもっ腹がへ
つて…」

三女の言葉に頷く長女

「そうさね…帰るとしようかい…辰、帰るよ」

「はい」

その場に立ち上がり荷物を抱き締めたまま笑顔で歩きだす次女

そして三姉妹仲良く家へと帰る事にした

「…で辰姉、その荷物はどうするんだ？」

三女の質問に次女は

「え〜とね〜とりあえず持って帰って保管しとくよ〜でもってまた
出会えたら渡してあげるんだ〜きつと困ってると思うし…」

次女の答えに三女は

「もの好きだな…タツ姉は…」

呆れながら家へと歩いて行く

「…そいつ面白い奴かな…ウチも会ってみたいぜ」

そんな事を考えていた

長女は

「…しかしあの辰が恋をね…辰を見る限りじゃかなりの気に入り様だ
し…どんな奴かね…まあ頑張りな…辰…」

妹の初めての恋に嬉しそうであった

そして当の本人の次女は

荷物を大事にしつかりと抱き締めながら嬉しそうに歩いていた

「…また会えるといいな」…次に会えたら名前を覚えてくれるかな
…嬉しい人だったら嬉しんだけどな」…リュウは家族としては大
好きだけど…弟らしくないんだよな」

そんな事を考えていた

そして腕の中にある荷物を強く抱き締め顔をうずめた

「…えへへ」あの子の匂いだ」…いい匂い / / /」

こんな感じで次女は家に帰るまで

ずっと顔を赤くして笑顔のままだった・・・

今回は少しだけ道が変わっただけである

これからどうなるかを知る時は

また道が変わる時である

16章 紫貴と日曜日 交わった道の先（後書き）

白状しますよ！

そうです

紫貴の為ではありません！

作者が好きだからです！

この三姉妹が好きだからです

特に次女は

この世界の中で

三本指に入るぐらい大好きです！

17章 紫貴と日曜日 犬の一日（前書き）

なんでワン子に後を追わせる話にしたんだろ・・・
特に意味のない事をする作者です

17章 紫貴と日曜日 犬の一日

これは黒峰紫貴の後を追った川神一子の話である

紫貴の後をつける事にしたワン子

紫貴に見つからぬ様、心がけながら追っているつもりはワン子であった

「又フフ…尾行は完璧だわ…今日は人も多いし見つかる事もないわね！」

身を屈めながら出来るだけ気を抑えて紫貴の後こそこそとつけるワン子…

はつきり言ってしまうえば商店街を普通に歩いている人よりはかなり目立っている

「…それにしても今日は普段より人が多いわね…やっぱりあのイベントのせいかしら？」

イベントとは一週間後の日曜日に行われる東西交流戦、西の天神館と東の川神学園が学校ぐるみで決闘を行うイベントである

世間ではそのイベントを一目見ようと、また情報を仕入れようとこの日曜日、ここ商店街も普段より人の数が多くなっていた

「東西交流戦…私も2年生出場メンバーとして頑張んなきゃ！」
テンションが高まり元気にガッツポーズをしているワン子…

かなり目立っていた

そんな中、紫貴がコンビニに入っていたのが見えた

「あ！あの人がコンビニに入っていたわ…買い物に来たのかしら？」

コンビニの窓硝子に張り付くワン子

中で紫貴が商品を選んでいる

「…何を買いに来たのかしら…お！トマトサラダのサンドイッチを

買ってるわ！朝食をしっかりと摂取し、さらに植物繊維もしっかりと補充するとは…今どきの若者にしては関心ね！」

ワン子が窓の傍で一人関心していると紫貴がコンビニから出てきた「買い物が終わったみたいね…でも朝食を買いに来たのなら何故川神院で食べないのかしら？…」

朝、ワン子がアルバイトから帰ってきて院の皆と朝食をとった時姉である百代の分と祖父である鉄心の分は用意されていた…

しかし、あの川神院で客人として扱われていた男の人の分は用意されていなかった

ワン子は最初、朝食をしっかりと取らない人間だと思っていた院の門弟である修行僧では朝をしっかりと取らない事は許されない健康の為もあるし、武術家が朝をしっかりと摂取するのは基本の事である

それは皆もしつかりと理解されている事なので誰もなにも言わないしかし院の門下生ではない客人に対してまでそれを押し付けたりはしない

客人が食べないと言えばそれは客人の自由なのである

しかし、川神院に来る客人は基本武術家である

だから今まで院に来客した人は皆朝食を食べる傾向があった

つまり、今回の客人である紫貴が初めて食べなかった人間であり

ワン子も珍しい人だと思っていた

しかしワン子も『そんな人もいるわよね』ぐらいにしか思っていなかった

しかし、今こうして客人である紫貴は朝食を購入したのだ

「…なにか皆と一緒に食べられない理由でもあるのかしら？」

そんな事を考えながらワン子が人差し指を顎にあて、首を傾げていると

紫貴がワン子の視界から消えている事に気がついた

「…あれ？…あれ！？」

キョロキョロと辺りを見回すワン子

しかし、ワンスの探し人は見当たらない

「…撒かれたわ!…アタシの追跡を撒くとはやるわね!」

一人で騒ぐワンスであった

「しかし!甘いわ!川神院とここの商店街の入口は基本一本道!
買い物に来たのならはこの商店街にいるはず!一軒づつ店を周りつ
つ、着物を着たあの人を見つけると簡単よ!…見てなさい!」
そう叫んだワンスは商店街を走って行った…

「み…見つからないわ…」

商店街の入口でしょんぼりしているワンスであった

コンビニから入口までの道筋にある店を一軒づつ周ったワンス

「黒色の着物なんて目立つからすぐわかると思ったのに…まさか!
はっとするワンス

「さてはコンビニから真つ直ぐに川神院に戻ったのね!…コンビニ
からこの入口までにはいなかったのだから間違いないわ!」

ワンスの頭の中には商店街の外に出た、着替えたという考えは思い
もしなかったのである

…まあ普通の人はいきなり着替えるとは思わないものだが

ワンスははなから商店街に用事があるのだから、商店街からは出な
いはず

と考えていた

実際には紫貴はコンビニから真つ直ぐに

現在、ワンスがいる目の前にある店に入り、衣服を買って
商店街の入口から出て行ったばかりであった

「ごうとわかればすぐに川神院に戻んなきゃ!」

そう叫ぶとワンスは川神院に向かって走って行った…

そして川神院である

「いないわ〜…どうして〜？」

かなり落ち込み涙をうかべるワン子であった

そんな中、院の入口で落ち込んでいるワン子の下に

「まったくシキはどこに行ったんだ？…ん？ワン子じゃないか…なに
してるんだ？こんな所で…」

そう言いながら現れたのは、ワン子の義姉である百代であった

「…あ！お姉様〜」

百代だとわかると、途端に笑顔になったワン子であった

笑顔で傍まで近寄ってくるワン子に

「お〜よしよし、ワン子はいつも元気だな〜」

ワン子の頭を優しく撫でる百代

「えへへ〜…お姉様に撫でられたわ〜」

犬のように目を細め、気持ちよさそうにするワン子

そんな二人に近寄ってくる人物がいた

「…いないの〜…こつちにはいたか？モモ？…ん？一子じゃないか」

二人の祖父、川神鉄心であった

「なんだじじいか…こつちにもいなかったぞ」

百代の言葉に鉄心は悩む

「ここにもおらんということとは川神院にはおらんということか…」

「そうみたいだな…シキの気配も感じないし…」

百代と鉄心を見たワン子は首を傾げる

「お姉様たち…誰かを探してるの？」

ワン子の反応に頷く二人

「お〜そういえば院の皆にはまだ詳しくは話しておらんかったの…」

「おいじじい…なんで皆には秘密なんだ？」

「別に秘密にしておる訳じゃないんだが…紫貴の事を本人がいない所で勝手に話す訳にもいかんじゃろ…本人にどこまで人に話してよいか了承をとらなくてはのう…」

「…シキならまかせる、の一言で済ましそうだがな」

二人の会話に置いていかれているワン子が話に入る

「…お姉様、その紫貴って人は黒い着物を着た人？」

ワン子の一言に反応する二人

「ああそうじゃ…一子、知っておるのか？」

「ワン子…なんで知ってる？」

二人の言葉にワン子は

「朝見かけたの…お姉様たちに話を聞こうとして…」

朝見かけた…その言葉に反応した百代がワン子が話終える前に、ワン子に問い詰める

「シキを見たんだな？シキはどこにいった？」

「落ち着かんかモモ…」

妹の肩を掴んで揺すっていた百代を鉄心が止める

「ああ！すまないワン子」

「…目が回ったわ」

百代に開放されてふらふらするワン子

「まったく…それで一子…知っているのか？」

鉄心の言葉にはつと元に戻ったワン子

「…ええつと…あのね…まず…」

そしてワン子は二人に説明する

自分が客人について知りたいと思っていた事

百代と鉄心が起きるのを待っていた事

そこで紫貴を見かけて気になって後をつけた事

途中で見失った事

探し回って、川神院に戻って来た事

全部である

「…と、いう訳なの…」

ワン子の話で納得する二人であつた

「どうりで川神院にいない訳だ…」

「これは紫貴が帰ってくるのを待ったほうが良いな…」
納得している二人を見たワン子が

「それでお姉様？その紫貴って人はお姉様と…」

言葉の途中でモジモジするワン子

「ん？どうした？ワン子？」

ワン子がモジモジしている事に気がついた百代

「…いや！なんでもないわ！…お姉様！その紫貴って人はどんな人？」

首をブンブンと振って笑顔になつたワン子

「ああ…名前は黒峰紫貴…ワン子たちと同じ歳だ…どんな人かと聞かれたら…どんな人だ？…一緒にいたら面白そうな奴？…違うな…一緒にいたら私が面白い奴か？…」

百代の回答に？マークをだすワン子

「…そういえばなんて説明すればいいんだ？…とにかくワン子があつて見て決めるんだな」

百代の言葉に頷くワン子

「わかつたわ！とにかくその黒峰君が帰ってきたらお話するわね！…それじゃあお姉様！アタシ訓練の時間だから！また後でね！」

そう言つてワン子は道場に走つていった

その場に残つた百代と鉄心

「…よいのか？モモ？一子に紫貴が舎弟になつた事を教えんで…」

鉄心の言葉に百代は

「それはファミリィ皆の前で話すさ…そのほうが面白そうだ」

笑いながら話す百代

「…悪趣味な奴じゃ…それじゃあワシも行くぞ、いろいろと忙しいのでな…」

そう言つて鉄心は建物の中に入っていった

「なにが悪趣味だ…一言多いんだよジジイは…」

そう言つて百代は院の入口に座りこむ

「…さてと…私の弟はいつ帰ってくるのかね…」

どうやら紫貴を待つ事にしたようだ

ただ今の時刻はちょうど昼ぐらいである

「ま…買い物ぐらいならすぐ帰ってくるだろ…」

そしてゆっくりと時間は進んでいくのであった…

「…遅い…もうすぐ日が暮れるぞ…どこまで買い物に行ったんだ…」

普段ならそんな性分ではないのだが

待つと自分で決めたため

意地になつてゐる百代であつた…

17章 紫貴と日曜日 犬の一日（後書き）

考えた結果、色々と話を混ぜる事にしました…

これからも超、ご都合主義に走ります…

ご了承を…

18章 紫貴と日曜日の夜 (前書き)

更新がかなり遅くなりました・・・。

落ちついて書けるのは年明けからになりそうです・・・

今回は紫貴が川神院に戻ってきてからのお話です。

18章 紫貴と日曜日の夜

日も落ちて辺りも暗くなり、日曜日も終わりに近づいていた。

ここは川神院にある川神鉄心の部屋、ここにいるのは鉄心と紫貴の二人だけであった。

「すまんのう紫貴、呼び出してしまって」

「……要件は俺のこれからの事か？」

鉄心の言葉に対して紫貴は単刀直入に聞いた。

それに対して鉄心はただ頷いたのである。

「……うむ……百代はまだ鍛錬の時間でな、だからワシと紫貴だけじゃ……」

「……静かでもいいな……本題に入ろう……これから俺はどうなる?……」

真剣な顔で話す紫貴に鉄心は笑顔で答えた。

「ホッホッホ……まあそう焦らんでもよからう……紫貴、お主に今一度聞いておきたい事があるのじゃ……」

鉄心の言葉に疑問を抱く紫貴……。

「……聞きたい事?……今一度と言う事は……確認か?」

「ああそうじゃ、確認じゃの……紫貴、お主は昨日言った事じゃ……間違いないか聞いておくのじゃ……一つ、紫貴は武人などではない、二つ、川神百代の舎弟である、三つ、紫貴がここ川神市にいる間はワシ、川神鉄心の指示に基本従うものである、四つ、紫貴は川神院には住まずに川神院の敷地外で生活を行う……訂正はないかの?」

鉄心の言葉に頷く紫貴。

「……訂正はない……それで俺はこれからどうすればいいのだ?話を聞こう……」

紫貴の言葉に鉄心が答える。

「ふむ……単刀直入に言おう……紫貴……学校に通うのじゃ」

鉄心の言葉を聞いた紫貴は目を細めた…。

「・・・その意図を・・・考えを聞かせてもらおう・・・」
紫貴の問いに鉄心が頷く。

「うむ、それはじゃな・・・それがワシと紫貴、両方にメリットがあるからじゃ！」

鉄心は力強く答えた・・・。

「・・・」

無言になる紫貴。

「まず、ワシのメリットじゃ・・・ワシは紫貴を家族と思っておる・・・できるだけ紫貴の人生の世話を・・・いや、手助けをしてやりたいのじゃ・・・だから紫貴をワシの目に届く範囲に置いておきたい・・・だからワシが学園長を務める、川神学園に通ってもらいたい・・・これがワシのメリットじゃな・・・」

鉄心が話している間、紫貴は鉄心を観察するように見ていた。

「・・・次に紫貴のメリットじゃ・・・お主は学校というものに関わった事がないじゃろ？・・・これは今だけしか関われないものじゃ・・・学校に通う事でのみ知る事ができる事が多々ある、それを学ぶ事ができるのじゃ・・・それにこの先、人に関わる事は嫌でも多くなるものじゃ・・・紫貴にとってこれがメリットとは考えらぬかもしれぬが、学校での人との関わりは練習になるじゃろ・・・それに高校を卒業しておけば今後、なにかと便利じゃぞ？所詮世の中は最終学歴じゃ・・・これが紫貴のメリットじゃな・・・」

鉄心が話終わつたのを確認した紫貴は目を瞑って考え始めた・・・。

「・・・鉄心に嘘は感じられなかった・・・これは鉄心の本心が・・・学校・・・俺に必要か？・・・たしかに学校というものには興味がある、これは間違いない・・・しかし、学校というものは人との関わりが必須だと聞いた事がある・・・それに時間の束縛・・・俺は耐えられるのか？」

じつくりと考えている紫貴、その間鉄心が言葉を話す事はなかった。

「・・・練習か・・・これを逃せば学校に関われるチャンス

は一生ないだろうな・・・通うだけ通ってみるか・・・」

紫貴は目を開け、鉄心を見た・・・。

「・・・俺が学校に通う事は可能なのか？」

紫貴の言葉を聞いて笑顔になる鉄心。

「学校に通う気はある・・・そう考えて良いのじゃな？」

鉄心の言葉に頷く紫貴。

「・・・興味があるのは確かなので・・・しかし、俺は今まで学校に通った事がない、いきなり行けるものなのか？・・・それに、普通の人間のように生活できるとは思わないが・・・」

紫貴の言葉に鉄心が答える。

「それは問題ないわい・・・たしかに高校に通うには・・・入るためにも多少の学力が必要じゃ・・・普通の高校では義務教育を終わらせていない紫貴を入れたりしないだろう・・・しかし、川神学園は違う、ワシが学園長じゃからな・・・ワシが問題なしと判断し、高校に通える力があるならば学校に入れるわい・・・そして後の質問も問題ないじゃろ・・・あのモモが問題なく学校生活を送っておるのじゃからな・・・」

鉄心の言葉を聞いた紫貴が反論する。

「・・・一年からか？・・・ある程度は読み、書き、計算はできるが・・・それは一般の義務教育までなのだが・・・」

昔、師禅が『ある程度勉強もあつたほうがなにかと便利じゃろ・・・面白いぞ？』と言い、どこから持ってきたのか小学校、中学校の教科書を持って来た事があつた。

紫貴は教科書を小説を読む様に読み、今までの本のように完璧に身につけていたのである。

その事を聞いた鉄心は

「・・・義務教育までは終わらせているのか・・・少し待っておれ・・・」

そう言つて鉄心は、部屋から出て行つた。

そして少しして鉄心が部屋に戻つていた。

「・・・紫貴、これを解いてみてくれんかの？」

そう言つて鉄心は数枚のプリントを紫貴に渡した。

「・・・これは？」

受け取つた紫貴が疑問に思う。

「なに、どの程度か知りたいと思つただけじゃ・・・軽い気持ちでやってみてくれてかまわんぞ、解けなくてもかまわんわい」

鉄心が笑いながら答え、紫貴は疑問に思いながらプリントを見て解き始めた。

そして十分もかからずに紫貴はペンを置いた。

「・・・終わつたぞ」

そう言つて紫貴は鉄心にプリントを渡した。

「・・・早い・・・流石に無理があつたか・・・!？」

プリントを見た鉄心が固まつた。

「・・・紫貴、その義務教育を身に付けるのに・・・どれ程の時間がかかった?・・・」

鉄心の問いに紫貴が?を出しながら答える。

「・・・どうした、鉄心?・・・教科書を一通り読んだだけだが・・・そんなに酷かつたか?・・・その『中学』の問題集・・・俺の記憶が正しければ義務教育では学ばぬ事も書いてあつたが・・・」

紫貴の言葉に口を開けて固まる鉄心。

「・・・一度読んだだけ？」

鉄心が信じられない顔をして紫貴を見る。

「ああ・・・教科書はとて易く書いてあつたからな・・・読むむだけで理解できた」

教科書を読むだけで内容を理解して身に付ける事ができる・・・そう紫貴は、勉学を学ぶ学生やそれを教える教員に真つ向から喧嘩を売る様な事をさらりと言つてのけた。

「・・・それで・・・次は何をすればいいんだ？」

紫貴の言葉に鉄心が我に返つた。

「あ・・・ああ、そうじゃな・・・いや、もういいわい・・・とに

かく学校に通う気はあるんじゃないかな？」

鉄心の問いに紫貴はけだるそうに答えた

「・・・ああ、学校に行ってみてもいいかな・・・昔から興味があったし・・・」

紫貴の答えに満足した鉄心。

「ならよいわい・・・すまんが紫貴、部屋に戻っていてくれ・・・後で用事がある」

鉄心の言葉に頷いた紫貴は、そのまま部屋を出ていった。

部屋に一人になった鉄心、椅子に座りプリントを見た

あらかじめ懐に入れていたプリントの答えを取り出し、紫貴が書いたプリントを見比べる。

「・・・本当に紫貴は不思議な奴じゃのう・・・わずか十分で・・・」

紫貴がプリントに書いた答えは九割が正解していた・・・。

鉄心が紫貴に渡したプリントとは、今年の川神学園の入学試験のプリントと・・・最近行った一年生のテストの問題であった。

紫貴が解けなかった一割とは、紫貴がまだ学んだ事がない問題だけであった。

しかも、紫貴が書いた問題は、その一割の部分が空欄、残りの書いた部分は間違いはなかったのである。

つまり紫貴が書いた答えは完璧に正解していたのである。

プリントを置いた鉄心は難しい顔をして考え事をしていた・・・しばらくして

「どうせなら紫貴には同じ年がいる2年生に通ってもらいたいのだろう・・・」

少しの時間悩み続ける鉄心、しばらくして頭の上にひらめきのマークが出た。

「そうじゃ！紫貴に2年生の教科書を読ませればいいのじゃ！」
そう叫んだ鉄心は微笑みながら部屋を後にした・・・

一方、鉄心の部屋から自分が使っている部屋へ向かっている紫貴。

「・・・学校か・・・昔を思い出す・・・」

昔、師禅が紫貴に言った言葉を思い出す紫貴。

『紫貴・・・お主、小学校に通ってみないか？・・・学校でしか学べぬ事が沢山あるぞ？』

紫貴が師禅の家で暮らし始めて、数年たった頃であった。

「・・・あの頃は拒否の一言で終了したんだな・・・」

本を読むだけで十分、行きたくない・・・師禅にそう言い続けた紫貴。

「・・・今思えば・・・怖かったんだろうな・・・」

知らない人間の事が。

周囲の目・・・自分を怪異の目で見る事が。

普通に生活できないと理解できてしまう自分が。

・・・すべてが怖かったのである。

「・・・まあ、静かに生活していたら大丈夫だろ・・・」

紫貴はそんなことを考えながら部屋に向かって歩いて行った・・・。

しかし、紫貴はまだ知らなかった・・・。

川神学園では静かに生活する事は不可能に近いという事を・・・。

あの一癖も二癖もある生徒たちのことを・・・。

そしてすっかりと忘れていた。

現在、紫貴にべったりであるあの川神百代が通っているという事を・・・。

18章 紫貴と日曜日の夜 (後書き)

話が進まないです・・・

ポンポンと紫貴を学校に入れちゃえば良かったとも思い始めています。

・・・今回の話は色々突っ込む点が多々あると思いますが、目を瞑って下さるとありがたいと思います。

ではまた次回・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019z/>

真剣で幻が通る道

2011年12月29日05時53分発行